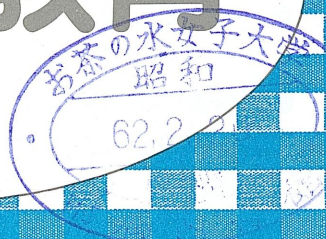


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987 **3**



保育の再点検〈全5巻〉

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマ
を取りあげています。
- 保育事例を分析し納得
いくまで話し合われて
います。
- 現場からの声として、
よその園の保育が紹介
されています。



①望ましい生活習慣 ②望ましい集団づくり ③望ましい当番活動
④望ましい行事と生活 ⑤望ましい言葉の指導

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。

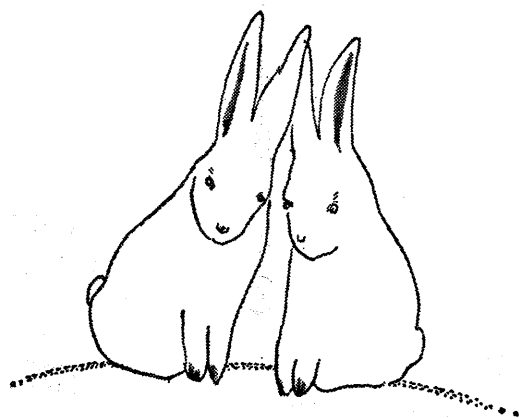
A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十六卷

第三号

幼 児 の 教 育 目 次

——第八十六卷 第三号——

© 1987

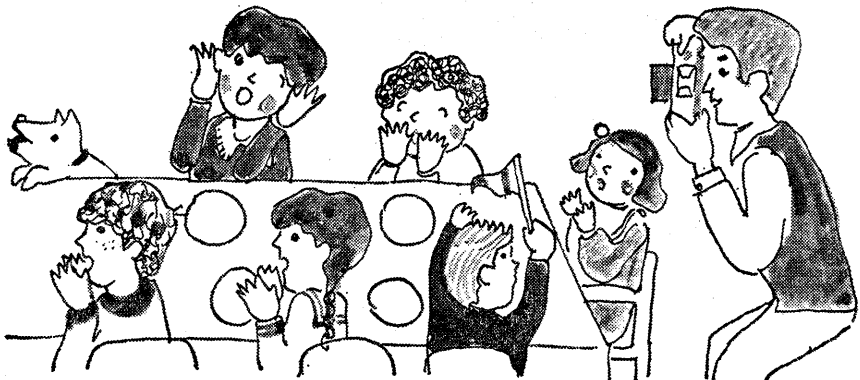
日本幼稚園協会

再び「子どもの世界を共に生きること」……………津守 真…(4)

SF的読み解き 子どもという風景

第二十三回 会話の文末……………堀内 守…(8)

女・子どもの「江戸」(その二)……………本田 和子…(18)



兎園隨筆 出会い（その三）—照千一隅—

蕪木 寿江…(26)

TOKYO アークヒルズと幼稚園…

編集部…(32)

わたりあう関係…

森下みさ子…(40)

「すみかとしての幼稚園」…

永倉みゆき…(45)

若いお母さんたちへ ある日のこと…

はるにれの会 木村磨理子…(59)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 誉子
土屋真美子



再び「子どもの世界を共に生きること」

津 守 真

子どもに手を引かれて一緒に歩いている時、子どもに要求されてそれにこたえる時、とり立てて際立ったこともないそうした時を、子どもと一緒に過している時、私は子どもの世界を生きているのだと思う。

私は、子どもとは逆の方向から子どもの世界を生きる。私の手を引くのは子どもであり、私は手をひかれて、思わぬところにつれてゆかれる。子どもを背負うとき、子どもは私の背中によりかかって安楽であるが、背負う者は次第に重さを増してくる。その手の指先に、私はその子の微妙な意志を感じ、背中の子どもの重さに、その日の子どもの心の状態を察することができる。子どもの世界は、神秘的な仕方でおとなに伝わるのではない。

それは、子どもに応答することによって、一緒に過す営みのひとこま、ひとこまにおいて、おとなによって体験されている。

応答するというのは、子どもの行動に対してではない。内的理解の観点からいうならば、行動は心の表現だから、私は表現を通して、心に応答しようとするのである。私は手を引かれながら、子どもの自らの小さい自由への要求を指先に察知し、そのささやかな意志を実現させてあげたいと神経を使う。庭の隅のシーソーに向って、大胆に手を引いてゆく子どもには、そこでふたりだけの時を充実させようと、防寒衣をととのえて急ぐ。おとなの背中に全体重を投げかけてよりかかる子どもは、いまや、そのおとなに心からの信頼を寄せているのであろう。それが分かると、簡単におろすわけにはいかない。

子どもと一緒にいながら、私は、自分のことしか考えていないことがある。そういうときには、身体は子どもに近くいても、心は子どもから遠く離れている。おそらく、だれにとっても同様だろうと思う。

いま私がみているひとりの子どもは、この数週間とくに、朝きたときからしっかりと私を確保し、私の手を引いてシーソーにゆき、身を乗り出して私にお話をしてもらい、それから、私を傍にひき寄せていくつかの遊びを次々にする。その子どもが、ある日、いつものように、私の手を引いてシーソーにゆき、さんざん笑い合って時を過ぎた後、急に、私の顔を手でひっぱたき、頬べたをぎゅっとなつねってから、私に背中を向けて庭の真中に向

って歩いていった。私は後姿を見送ったが、そのあと子どもは室内でひとりで粘土をし、他の先生を相手に何かをしていた。

最初、私は叩かれたとき、何も外的な理由は見当らなかったから、朝早く起きたとか、きのうの休日の疲れとか、何か身体的不快感があるのかと思った。しかし、その後の行為を見ながら、じきに私は思い返した。この数週間、私にとくに強い親愛の情を抱いたこの子どもは、自分の道を歩むことを求めているのだろう。そのためには、これまで親しんだおとなに、反逆し、けとばすことも必要なことだったのであろう。父親のような力あるおとなに、自らを同一化するほどに愛着を抱いたとき、子どもはそれによって何かを得た後、そのおとなとは違う独自の自分の道を歩むようになるのではないか。そのときに、おとなは、反逆して自らの道を歩んでゆく子どもを、祝福して見守ることが必要になるのだろう。保育者は、しばしば、子どもが自分自身を確立してゆくための踏み台となる。

このようなことを考えるに至ったのは、この子どもが、私とシーソーを楽しんだ後に、私を叩いて去るという行為をしたからであった。そして、この行為は、それに先立つ私と子どもとの数々の応答の過程から生れた結果である。

こうして後になって考えるとき、この子どもが私の手をひいてシーソーに向って庭を歩いている最中にすでに、この子どもの心には、私に親しむ心と、反逆して自分の道を行く心との両者の思いがあったのだろうと思う。しかし、子どもと一緒に歩いているときの私には、そのことはまだ見えていない。ただ、手を引く子どもに応答し、あとになると覚え

でもない数々の小さなことで笑い合ったり、語りかけたりしながら一緒に歩いてゆくのである。私は、その過程が保育の最もたいせつな部分なのだと思う。

その過程のひとつひとつに丁寧に応答してゆくことによって、結果として、その子どもの世界の本質があらわされた行為が生れる。

子どもがシーソーに向って歩いてゆくとき、かならずしもシーソーに到達することが目標となっていないのだらう。むしろ、私に愛着をもちつつ、私から自立し離れてゆくこうとする思いの方が、子どもの心を占めていると云えるかもしれない。そのときにはそれは分らないながらも、私は外的目標にとらわれることなく、子どもの心の動きに合わせて、どこにでも一緒に動いてゆくのである。行先はシーソーでなくともよい。他のことに変るかもしれない。子どもの心と一緒に、無心に歩んでゆくことが肝要である。

私は、毎日ふれる子どもの生活のひとつひとつに、子どもの世界があることを認識するようになったとき、毎日を子どもと過すことが一層たのしくなった。よく分らないままに、心と心で応じ合ってゆくうちに、子どもの世界の本質のあらわれる行為が生れる。きょうは、どんな行為が私のまわりに生み出されるか、それがたのしみである。

子どもと生活を共にする者は、自分だけの世界ではなく、子どもの世界を共に生きることがゆるされている。何と愉快なことではないか。

(愛育養護学校)

——SF的読み解き 子どもという風景——

第二十三回 会話の文末

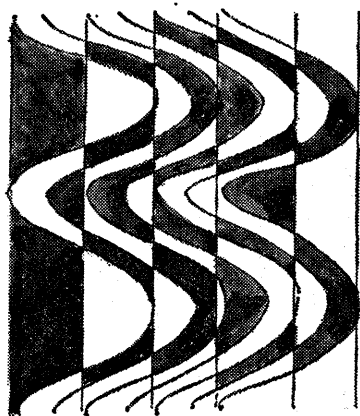
堀 内 守

多彩な文末

幼稚園で、園児たちの会話の取材をした。内容を調べたかったのではない。会話の調子、リズム、間などが気になったからである。とりわけ、会話の文末に関心があつた。

世が挙げて「ネ・サ・ヨ」の「追放運動」に熱心だった頃のことだ。もっとも、いまでもその種の「追放運動」はさかんだから、ずっと時は継続しているというべきだろう。

さて、その「ネ・サ・ヨ」だが、今さら説明するまでもなく、会話の場面にヒンパンに登場するところである。それが、いかにヒンパンか、あらためて考える必要



もないくらいだ。現に、「おはなしするときに、おわりのところに、「ネー」だの、「サア」だの、「ヨー」だのをつけるのはやめましょう」と生徒に訓話した校長先生が、朝礼を終えてのち、校長室に戻る途中、他の先生に「そーなんだよね」とか、「そりゃ、そーさ」とおっしゃっているのが目撃されたほどである。

「ネ・サ・ヨ」だけではない。「ワ・ノ・ナア・ゼ」なども使われる。

物語を話すのではなく、明らかに「ためになる話」(つまりは「訓話」のことだ)を意図して生徒に話すのに、ふんわかった「オハナシ」という表現にしている小学校にも、右のようなオカシナこともある。

呼びかけ

なるほど、たしかに「ネ・サ・ヨ」は、気持が悪い使われ方をする場合もある。不敬、無礼、非礼に当たる上に、ブザマに見えることもある。だが、「そりゃ、そーさ」とか、「そりゃあ、そーだよ」は、そのときの気分

やニュアンスをあらわし、呼びかけ効果を出すためには不可欠なのである。のみならず、これは文末を多彩にしてくれる。名詞止めや副詞止め、あるいは文の中断した形まで、幼稚園児のなまの会話は、驚くべき変幻ぶりを教えてくれた。たとえば――

「これはなに？」

「これ、なに？」

「これ、なーに？」

「これ、なーに、よ」

「これ、なーに、たら！」

「これ、なーに、つてきいてるでしよ」

「これなーに、つて、きいてる！」

「これなんでしよ、ね」

「これ、これ、なーに、これなーに？」

「これ、なんなのさ」

「これ、なんだろなあ」

まだ、まだ、たくさんある。しかし、この多彩さをしばらく味わってみよう。

もし、この文のエッセンスだけに目を向けるなら、右の一連の文はことごとく、そのニュアンスを消し、ただひとつの「コレハ、何デアルカ？」に還元させてしまふ。平たく言えば、中立的で、味もそっけもなくなってしまうのだ。

ところが、文末に目をやり、それぞれをくらべていくうちに、言いまわしの自由さ、センチンスの終りの部分の変化、語り手の微妙な気持などがわかってきて、ほほ笑ましくなってきたりする。男児と女兒の区別さえつくのである。

ママゴト

ママゴトの場面になると、思いがけないことばが出現する。どうして、どこで、こんなことばをおぼえたのかと思われるくらい。単語だけではない。文末も見のがしがたいのである。観察したときの園児は、五歳と六歳だった。

「いらっしやいませ、なにになさいますか」「

「あいにく主人はカインシャです」

「お気をつけて、どーぞ」

右のようなことばが出てきたのである。ママゴトは、あくまでもヨソ行きの場、ドラマの場だから、子どもたちの日常とは異質のルールが支配する。しかし、ママゴトは、そのルールを全員が承認することからはじまるわけである。してみると、これらのやりとりは、そういうルールを承認し、ルールを使えるまでになっていることを示しているはずである。

「ネ・サ・ヨ」の“追放”は不可能だろう。

むしろ、その“追放”運動は、ことばを「物」として扱うことに通じていないだろうか。同じ「ネ」であっても、いちがいに“追放”に値するとはかぎらない。「ヨ」でもそうである。一般の人のヒンシュクを買いそうな、「それでヨ」とか、「それでサ」などにしても、間の取り方いかんでは柔かくも響くし、不遜にも、フテくされにも響く。

「昔々、あるところに……」にはじまる物語のなかに

は、これらの文末を多彩に使い分けて、思いがけぬ深みと味わいを生かしているものも少なくない。

「あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。」

「ある処に、ぢぢとばばがったとき」

「さる処に、ぢーぢとばーばがいたそーな」

「さる処に、ぢぢばばが住んどったと」

こう列挙してみると、死語になったものや、方言にあらわれたものにはふしぎな味があることがわかってくる。のみならず、身のまわりを見まわしてみれば、それこそ調子に乗って、得体の知れぬ文末語が生まれているのに気がつくだろう。

「これは本なのだ」「これは本なのである」「これは本ですばい」「これは本じゃん」「これは本でございます」「これは本だがや」「これは本だなや」。まだまだたくさん。

気になる文末

文章を書くようになると、文末が気になる。

これが気になるのは、子どもの世界から遠のくことのように思われようが、実はそうでもなさそうだ。

ここで思い出されるのが芥川龍之介の文章である。三十五歳という生涯のうちに、多彩な文体を残した。まるで文末の実験場のようなその文章は、文末の反復をさけ、慎重に文章を練っているのがよくわかる。「です、ます」による『杜子春』、『ございます』による『蜘蛛の糸』、『ござる』による『奉教人の死』、『おじゃる』による『きりしとほろ上人伝』等、まことにニュアンスに富む。

これらを書き並べていくと、『ござります』『ございます』『ござんす』『ごんす』『がんす』『ごあす』『がす』『ごす』『げす』までが一連の地下茎となっていることがわかってくる。

子どもの会話を耳を傾けていると、この多彩さが、下手な文法の知識をはるかにみ出して魅力的に迫ってくる。

アノ・ネ

文末のことばは、単なるシッポではないのである。それは相手とのかわりを求めている話者の態度を示している。もちろん、そのなかには関係をもたたくないという拒否のかわりも含むのだが。

いま、かなりヒンパンに用いられている便利なことばがある。「どーも」ということばだ。どなたも身におぼえがあらう。いろいろなところで簡便に使っているから、あらためて考えてみても、自分ではわからないかもしれない。それほど簡便なのだ。また、「あのう」もある。「えー」とか、「あのー」なしでは、会話にならないことすら生じる。それも余分なことばなのではない。それは間合いをとる。そして、これから話そうとする身がまえをつくるのだ。外国の人で、日本語を学んだ人は、かなり話せるようになるにつれ、だれも「あのー」「そのー」「えーと」などをかならずささむ。だから、こういうことばは、個人的なクセの問題ではなく、日本語のシクミのなかに埋め込まれているというべきだろう。

チェコ語で「イエス」に当たることばは「アノ」である。「ノー」に当ることばが「ネ」だ。「アノネ」と言ったら、「イエスとノー」ということになるが、実際にはそういうことは生じなかった。日本語でしゃべっているあいだは、しきりに「アノネ」などとやるが、チェコ語をしゃべっているときには出なかった。これは貴重な体験だった。同じチェコ人でも、日本語にタンノウな方は、「あのね、そのー、えーと、なんて言うか、そのー」などと言う。

呼吸

さて——ふたたび、子どもの会話に戻る。

息せき切って、という表現があるが、子どもの会話にはよくそういう調子のものが出る。

「センセ、アノネ、ソノネ、アッチデネ、ユキチャンガネ、コロンデネ……」

「ネ」ごとに呼吸をしている。

「先生、あちらでユキちゃんが転びました」に相当する

内容が、このように気ぜわしく、ある緊迫度を加えて伝えられる。内容が伝えられるのみではない。話し手が、それにどうかかわっているかまでが表現されているのである。さらに、「先生」に何を期待しているかまでが。こうなると、長々した「おはなし」を子どもに向けてするには幾通りもの工夫が必要になってくる。

この辺の「呼吸」を心得た「先生」はどういう工夫をしておられるのか、その辺もぜひ知りたいものだと思う。そこでやってきたのである。

子どもたちが帰ったあとの園内でインタビューに応じていただく。インタビューにも「呼吸」がいる。そういえば、「精神」の元のことばは「呼吸」である。つまり、表現は身体をベースにしている。それがこのことばにも暗示せられているのである。

私がまず注目したのは「先生」方の手であった。手首が柔軟に動き、ことばと連携して多彩な表現をしている。

身になって

元来、日本語の「からだ」ということばは「からだち」に由来するといわれている。「だち」は、「枝」を「えだち」と言うのと同じである。また、「からだ」のこゝとを「み」とも言う。「み」は自分のこと、からだのこゝとを意味している。

「むね」。これも広い。伸縮することばである。「むねが痛む」「むねがふさがる」「むねがさわぐ」「むねをふくらます」「むねをなでおろす」等々。次に「はら」。これは「こころの庭」を意味している。「はらが立つ」「はらをすえる」「はらをわる」「はらがふとい」等々。これらは、私たちが日常使っている表現だが、ことばとなったときから「からだ」のイメージを伴っている。

なぜこんなことを問題にするか。理由は明白である。つまり「先生」たちは、単にことばだけで応答せず、かならず「からだ」でも多彩な応答をしているからだ。

これまで考えてきた文末に関係づけていうと、文末は主体の気分や行動を表現していた。あれと同じなのであ

る。だから、「先生」方に、「ネ・サ・ヨ」を禁じてしまったら、子どもとの応答はぐっと変わってしまうだろう。それぐらい、この「ネ・サ・ヨ」が「先生」方の手にかかると、「み」のある表現であることがはっきりとわかってくる。

気配

「心配」と書くと、今日では「ことばどおり」にシンバイである。これを「こころくばり」とすると、だいぶニュアンスが変わる。それだけ広くなる。しかし、いぜんとして「こころ」に関心が集中している。

ところが、似たようなことばでも、「気配」となると異なってくる。「けはい」は、「こころ」だけの問題ではなくなつて、あたりとこれを感じする「からだ」とがいっしょになった状況を示している。

幼稚園の「先生」方が子どもにいる気配に敏感だということは、園にいてじっと観察しているとよくわかる。実際、背中に眼があるのか、と思われるほど、身体をつ

き抜けて、背後にいる子どもにまで気をつかっている。

「先生」方の「からだ」は敏捷である。いちばん驚かされたのは「身のこなし」。特に歩くときの身軽さ。もちろん、かなり体重のありそうな人もおられる。だが、歩くときは、まったく軽い。ドタ、ドタ、というような感じはさらさらない。

ということは、「からだ」がそのまま表現手段になっているということである。

身体のしなやかさ

これは体育とは関係がない。腕や腰、頭、上肢、下肢というように部分的にからだを曲げたり、伸ばしたりする体操とは違って、からだのしなやかさが表現手段に通じているのらしい。鞭のようにしなやかである。

もうひとつ、からだと関係のあることについて言おう。それは発声である。だれでも生まれつきだと思つていなければならない。声は変声期以後にも変わる。あるトレーニングによって、身体はふくらんだり、へこんだりする

が、それに応じて発声が変わってくる。まず全身をほぐし、アクセント、区切り、イントネーションというぐあいに練習する。

こういう練習こそ、肉体の解放という問題の出発点になると思う。

注意の集中と配分

ついでに、もうひとつからだに關係のあることについて考えてみよう。

人間の注意力という問題だ。これは、子どもの場合も見ればわかるように、放っておけば拡散する傾向にある。ところが、急に名前を呼ばれると、その瞬間から注意力がその声のした方向に向かう。日常的にもよく観察できるが、教室などではこれが強制されるわけだ。注意力が強制されながら、あたかも自発的に生じているかのように、授業の流れにそって切り換えられていかなければならない。

しかし、厳密に言うと、教室では注意力は一点に集中

しているわけではない。黒板を見たり、ノートを見たり、先生の方を見たり、というぐあいに適当に配分されている。

これと同じように、幼稚園の「先生」方の注意力は、子どもたち全体の上に及び、また個々の子どもに向かっている。

さて、以上が練習の基礎である。この上に、ある動作をして、それが然るべき意味を表現できるかどうか試してみることにしよう。たとえば、ドアに近づいて、手でそれをあけてみる、という演技を試みる。まず目で見当をつける。どの辺に、どのようなドアがあるのか、ノブがどのような構造のものか——これらは、いわば目で働きかけているということに相当する。つぎにノブをにぎる。

これだって、いいかげんにやることはできない。あけるのはドアなのだ。ノブだけひっぱるかっこうをして、演技にはならない。あらかじめドアの構想をきちんと想像し、それを開くときに、自分のからだのなかでど

のようなエネルギーの移動があるかを味わってみなければならぬからである。想像力をゆたかにするというのは、こういう働きかけと不可分なのである。

子どものマネ

子どものマネをするには、少くとも右にのべたような経験をしてみるとよい。このうちで、特に大切なのは、あることを為すのに、身体のみでエネルギーはどう移動するかを自分で工夫してやってみることだろう。

そうやってみると、子どもとおとなの違いも、具体的に見えてくる。たとえばこんな例をあげてみよう。

「待つ」という行為がある。これをおとなの場合と子どもの場合とに分けて演じてみるのである。いろいろなことがわかって面白いと思う。第三者に観てもらうのが好演の必要条件となろう。

「待つ」ということ。それは状態であるとともに行動でもある。そして、「待つ」ということは、かなり脳が発達していないと起こり得ない。ネズミは、待つことがで

きない。警戒することはできるけれども、待つことはできないのだ。子どもはどのくらい待つことができるだろうか。その場合でも、いろいろな行為をして、まだかな、まだかな、とつぶやいたり、たずねたり、いらいらしたりするに違いない。それは見ることでできる行動だが、同時に頭の中では「どうして来ないのかな」とか、「もう怒ったぞ」とか、内的行動もしている。

したがって、子どものマネをするといっても、これらの行動を含めて演じなければ、平板なものになってしまう。先に「エネルギーの移動」と呼んだものは、このようなことをさしているのである。

朗読する

それができれば朗読も一段とうまくなるだろう。

子どもの場合、出だしに力を入れる子がいる。プツプツ文をこま切れにしてしまう子がいる。変なイントネーションをつける子もいる。文末だけはつきり言う子もいれば、文末を飲み込んでしまう子もいる。唇の先で読む

子もいる。

けれども「先生」は、発声器官をはっきりと働かせるため、からだをしなやかにし、その文章の中身を、読み手として納得し、理解した上で、聞き手に伝えられるように努める。どこがポイントか、どこがヤマか、どこを高く、どこを低く……というような工夫は、あの演技がベースになって、きちんとできるようになる。これとても、からだの中をエネルギーがどう移動するかをあらかじめ想定してみることを経なければならない。

どうしてもリハーサルが必要になるのもそのためである。

朗読と聴くことは背腹の関係にある。よい聴き手は、同時によい話し手でもある。実際に、日常会話を反省してみると、話し手の話を聴いているときに、聴き手の心のなかではエネルギーの移動が起こっている。そして、その話を聴いている最中に、次の答えがこちらのなかで生まれている。これこそ生きたつながりだ。返事として発せられることばは、飛び出すべく待ちかまえていると

いうことになる。だから、返事は、圧縮されたものとして出てくる。

子どもはなかなか待ってられないから、返事は圧縮された形としてよりは、思いついたらすぐに、ことばが子どもをつき動かす。

ことばが子どもをして語らしめるように見えるのもそのためである。

こんなわけで、子どもを演じてみることによって、私たちは自分自身をよく理解できるようになる。

そして、よく考えてみると、「いい年をした」おとなの中にも、ちゃんと子ども心は生きていて、こういう演技に呼応するらしいのである。それを稚気と呼ぶか、茶目づけと呼ぶかは大した差ではなさそうである。ひとつ裏側にまわってみると、大哲学者、大詩人（あるいは小哲学者、小詩人でも）のうちで、しなやかなからだところをもっている人は意外に多いのがわかってくる。

（名古屋大学）

女・子どもの「江戸」(その二)

本田和子

◆ 儀礼と習俗のはざま

正月には、男よし。女わるし。

二月には、男よし。女わるし。

三月には、男よし。女わるし、貧^{ひん}なり。

四月には、男よし。女よし。

五月には、男命ながし、女貧^{ひん}なり。

六月には、男よし。女わるし。

七月には、男貧なり。女わるし。

八月には、男よし。女わるし。

九月には、男よし。女わるし。

十月には、男よし。女わるし。

十一月には、男よし。女わるし。

十二月には、男官位あり。女よし。

右の引用は、『女重宝記大成』の中の「月によりて生

まれ子のよしあしの事」という一節である。『女重宝記大成』とは、元禄五年（一六九二）以降、数回にわたって版を重ね、女子の懷本として広く活用されたという。

現代風に言えば、「生活百科事典」とでもいうことになるうか。その第三巻が「懷妊の巻・子をだてよう」というわけで、妊娠・出産・育児にかかわる諸知識が順を追って列挙されていた。

前回は述べたことだが、「江戸」という都市の出現は、「生活」の情報化を促進している。農村共同体の中では、格別に意識されることもなく、日常的な慣習として、前の世代から後の世代へと身体的な行為を通じて伝承されていた生活行為のあれこれを、文字文化に浮上させる必要が生じたということだ。結果として、女や子どもを支配していた儀礼や習俗の代表的なものが、書物上に形をあらわし、それに付随して、先の引用のように、密かに囁かれていた迷信の類いまでもが、白日の光にその姿をさらしたのであった。これによれば、女兒にとって幸運の生まれ月はたったの三月、すなわち、女の子が生まれ

て祝福されるのは、「四月・十二月」だけということになる。

ここに、歴史が長い歳月をかけて刻み込んだ男女差別の跡を見ることは容易だろうし、また、中国渡来の儒教的人間観が、変容に変容を重ねつつ日本的俗信と手を結び、奇妙な形で庶民の間に定着していった経緯を読むことも可能である。そして、こうした一連のメカニズムを探ることは、わが国の文化と外来思想との生きた結び付きを、それこそ「衆のレベル」で掘り起こす企てとして、極めて興味深いものである。しかし、ここでは、こうした学問的興味は傍において、伝統的な習俗が、都市化されつつある生活の中で、子どもたちとどうかかわり合ったかを見ていきたい。すなわち、江戸の子どもたちをめぐって、どのような儀礼とどのような習慣が、どのような意識によって生きられたのかということだ。

多くの場合、赤ん坊は、「産屋」として囲われた一隅で、「とりあげ婆」などと呼ばれる介助者に助けられつつ、人間界に産声うぶごゑをあげた。出産行為は、農漁村の場

合、しばしば「産小屋」と呼ばれる別棟で行なわれたとされるが、都市の住宅事情は、それを、家の中の片隅を屏風で囲う程度へと簡略化させている。結果として、別棟を設け、煮炊きの火まで別にして厳しく遠ざけられていた「産のけがれ」が、こうして日常生活の中に組み込まれることで、なしくずしに解体されていき、同時にその神秘性をも剝奪されていった。

「とりあげ婆」は、単に出産を介助するだけでなく、生まれてきた赤ん坊を人としてこの世に送り出すのに手を貸し、その後の生涯を通じて親子に準じる特別の関係でその子と結び付いた。一種の「代理母」とでもいうべきだろう。そして、一方では、赤ん坊を人間界に位置づけるその前に、あの世に送り返す「子返し(間引き)」の役割も委ねられていたから、彼女の力は大きかった。しかし、かつては、一族の長老や共同体の中で尊敬されている老女の肩に背負わされていたこの役割が、江戸の中期頃から、徐々に「職業的産婆」の側に移行してくると、子どもとの間の相互的な関係も変り始める。すなわ

ち、取り上げ婆は、文字通り子どもを「取り上げる」だけの技術者になり、代理母的な機能を消失するのである。かつては、共同体の強い結び付きの中に、しっかりと絡め取られていた幼いものの位置が、バラバラに解体された単一の家族の中へと、変貌させられていく過程がここからも浮かび上ってこよう。子どもは、「両親のもの」へと変化し始めるのだ。

さて、生まれてきた赤ん坊は、先ず口中を布で拭われる。胎毒を防ぐというのがその理由である。出産を「けがれ」と見る心性は子どもに残る胎内の名残りを「毒」と見なして、極力排除しようと考えたらしい。成長の過程で生じる様々な病氣も、しばしば、その原因を「胎毒」とされて、産穢の呪縛力がなみなみならぬものであったことを物語っている。先に述べたように、都市の生活は、出産に関する様々な禁忌を、なしくずしに解体していった。にもかかわらず、母胎での生活を「けがれ」と把え、その名残りを「胎毒」と忌む心性は、女性の「産む」行為に向けられた、畏怖と蔑視の根強さをあら

わにするのではないか。

臍帯の切断、産湯うぶゆという手続きを経た赤ん坊は、先ず、古着などのボロに包まれて後、一定期間を経て、新しい産衣うぶぎに着がえさせられた。この習俗は、赤ん坊を悪鬼の目からかくし守るためという説明も試みられている一方、未だ人間の仲間入りしていないこの世とあの世の境にすることを示す、特別の「しるし」であるとも解釈され、明暗二筋の光にさらされている。いずれにせよ、生まれた赤ん坊は、真新しい衣類で包まれてはならなかったらしい。

命名は、がいて七日までに行なわれ、この頃に、水の神・火の神・廁かまどの神などに参るため、初外出する風習もあった。いわゆる「宮参り」は、男児三十一日（三十三日説もある）、女児三十三日に行なわれている。いうまでもなく、宮参りは、農村共同体への加入儀礼であり、土地の氏神に詣でること、その神の氏子となるためのものであった。しかし、江戸や大阪など都市化された人々の暮しの中で、共同体への加入儀礼は意味を失な

う。従って、単に子どもの健康を祈願し、その成長を刻む儀礼として機能しようだ。小児科医香月牛山が、宮参りによって風邪を引かせたり、乗物にゆられて病気にさせたりしては、元も子もないと注意を促しているのも、こうした意味の変質を物語るものと言えよう。

江戸中期以降盛大となった「初節供はつせうぐ」の風習も、同様の推移を示している。里方や親類から贈られて子ども身辺を華やかに飾った雛人形や幟はしほも、かつての「精霊流し」や「神送り」の神聖さを失なって、その代り、子どもの成長を祝う節目として機能し始めたのであった。

成長の節目と言えば、三歳、五歳、七歳の祝いは、古代からの伝統を引きずりつつ、江戸の庶民のものとなった。現在の「七・五・三」の原型は、この頃出来上ったと言い得よう。しかし、五歳の祝いは、「袴着」というその表現が示すように、いかにも上流階級のものであって一般にはさほどの普及を見ない。代りに、男女とも重要な節目とされたのは、「七歳の祝い」であった。赤ん坊のときの「宮参り」が、本式に効力を発揮するのは、

「七歳」であるという習慣が農村共同体にはあった。また、中国伝来の社会規範は、「男女七歳で席を同じくせず」と主張している。『内則』や『家礼』など、当時識者たちが依拠した中国の古典は、学び始めの時機を凡そ「六歳」としている。このことも、当然、識者たちの視野に入っていたであろうが、わが国で、一般の人々に好まれたのは、どうやら「七歳」という区切りであったらしい。

私どもは、先人の愛好したという「七歳までは神のうち」という、美しい俚言^{りげん}を耳にしている。七歳までの幼いものとは、いまだ人としてこの世に定着していない。彼岸と此岸の境界にたゆたい、両界を往還する「人ならぬ子どもたち」……。彼らが、漸く一人前の人間としてこの世に足場を定め、大人になるための道を歩き始める。「七歳」とは、そういう年齢だったのである。

◆ 「雛祭り」をめぐる

三月、雛の月。子どもたちの周囲に、華やかな人形の

季節が訪れようとしている。緋の毛氈に内裏雛、三人官女。こうした雛飾りの原型は、江戸期に成立した。そもそも、三月の節供に雛を飾って、女の祭りとしてこれを祝う風習も、江戸の所産であるという。しかし、五月五日、端午の節供を男のもの、翌六日を女の節供とする風習も、江戸期には見られるから、三月の女の節供は、歴史が新しいだけ定着し切れない、あやふやなものだったのかも知れない。

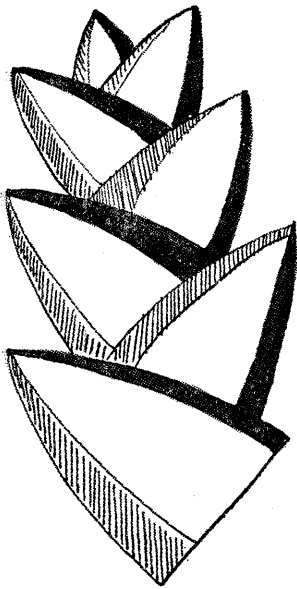
『嬉遊笑覧』（一八三〇）は、「今の雛祭は上巳の袂を思へるにや」と書き出して、『源氏物語』には元日にも野分の朝にも雛で遊んだとあるから、三月三日に限らないらしいと述べながら、享保（一七一六年）以降、この日が民間に定着したことを考証している。俳諧関係の書物や、好事家の随筆に「三月三日節供」とか、「ひな遊巳日袂」などと記されることが多くなるからということらしい。

しかも、初めは屏風の前に二対の人形を置き並べる程度だった雛飾りが、瞬く間に華美を極め、段飾りに、武

家の嫁入り道具を模して簞笥や長持などミニチュール玩具の数を競うようになると、それを取締る通達がお上から出されるほどになった。たとえば、享保六年の布告は、八寸以上の人形を作ってはならない、人形に金糸入りの衣裳を着せてはならないなど、細々と具体的に禁止事項を定めている。ここには、町人の富を反映しながら、雛祭りが華美を競う行事として急成長していくありさまが、如実に示されているよう。

雛祭りが「巳の日の抜」と関連づけられていることか

ら見て、何らかの呪術的な意味を引きずっていたと考えられる。災いを抜う儀礼には、古くから「人形」が重要な役割をになわされていた。その源流には、あるいは生贄との関連が探られるかも知れぬが、ともあれ、人形は、災いを一身に背負って追いやられるものとして「流し雛」や「埋め雛」の儀礼の中に位置づいている。川柳の一句は、次のように、井戸や廁に埋められる人形のことを歌っていた。



なぜにじゃの 雪隠にうづむひいな様

(宝泳六、軽口頓作)

『嬉遊笑覧』も、相模地方の例として「雛流し」の習俗を伝える。すなわち、「年毎に古びな損したるを見女共持出てさがみ河に流し捨ることあり」「互にひなを流しやることを惜みて彼白酒をもて離杯を汲かはして、ひなを俵の小口などに載て流しやり、一同に哀み泣くさまをなすことなり」と、その情景を記し、「おもふにひなを河水に流すはもと拔除のことによるなるべし」と解説を試みている。現在も、鳥取地方などに見られる「流し雛」の習俗が、当時はあちこちに見出されたということでもあろうか。

こうした行事、つまり、災いを川に流すといった儀礼行為は、何故か、しばしば女兒に委ねられていた。人々の災厄を背負って村を出ていく「人形」を、ねんごろにもてなして送り出すのは、先の一文にも見られるよう

に、多くの場合女兒であったし、盆の「精霊送り」も、女兒のつとめである。柳田国男は、この間の経緯を、次のように説明している。「盆は目に見えぬ外精霊や無縁ぼとけが、数限りもなくうろつく時である故に、これに供養をして悦ばせて返す必要があったと共に、家々の常の火常の竈かまどを用いて、その食物をこしらえたくなかった。それが、門・辻・川原等に、別に臨時の台所を特設した理由であり、子どもはまた触穢の忌に対して成人程に敏感でないと考えられて、特に接待掛りの任に当ったものと思われる」と……。

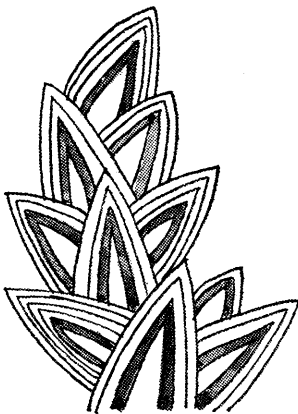
大人たちが手を触れたくない「死霊」や「病い」「災難」などのけがれを、子ども、とりわけ幼い女の子たちに肩代りして貰って、地域の外に追い払おうとする。考えてみれば女の子は、災いを背負わされて川に流される「人形」同様、人々の安全を守るための可憐な生贄、一種の人身御供でもあった。このことは、一方で、メディアエーターとしての女兒の特権的なありようをも証している。日常的な生活世界で、格別の役割をになわされている

ない女の子こそが、此岸と彼岸を取り結ぶメデュータ
ーとして、聖なる使命を遂行し得るのだから。川原に集
まって、白酒を汲み交わし、涙をもって雛を見送る女の
子たちは、巧まずして神送りを演技する可憐な巫女であ
ったろう。

さて、このあたりで、私どもの目を、いま一度、江戸
の雛祭りに向け変えよう。三月上巳のこの祭りが、こう
した「雛流し」などの影を引きずっているとすると、
雛壇の前で笑いさざめく女の子たちも、かつて災い除け
に奉仕した幼い巫女たちの名残りである。ただし、川の
彼方に遙かに広がる異界を消失した都市の心性にとっ
て、飾られた人形は、災いをなう形代であることを止
めて、わが子を楽しませ、同時に己れの富を誇示する、
ぜいたくな観賞物へと変貌しかけている。同様に、子ど
もらの上に注がれるのも、ひたすらな愛玩のまなざし。
彼女たちも、また、かつての巫女性とそのゆえの救世主
的役割から解かれて、春の一日をただ陽気に笑い楽しむ
だけである。

ここに見られるのは、「大人」と「子ども」が、保護
・愛育の感情を挺子にしながら、「するもの」と「され
るもの」という勾配関係で結びついていく姿であろう。
「雛祭り」という、華やかで愛らしい行事一つからも、
私どもの視野に浮かび上るのは、紛れもなく変貌し続け
る江戸の子どものありようなのだ。彼らはかつての聖性
とそのゆえの呪力を剝奪され、代りに、陽気で可憐で遊
び好きの、愛撫にふさわしいものと変貌しつつある。

（お茶の水女子大学）



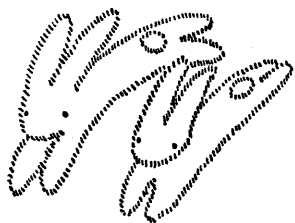
出　　会　　い　　（その三）

——照　千　一　隅——

蕪　木　寿　江

ブルドーザーが狂ったように緑の丘陵を赤裸にくだき、ダンブカーがたんぼを埋めていた。その騒音にも馴れ、道路が舗装されたと言っては喜び、鉄道が通ったと言っては喜んでいるうちに、住宅や商店と一緒に幼稚園もやたらに増えてきた。「一つの台地に各園の十一台のバスが来る」と言われた。そしてその大方の幼稚園は堂々と文字指導をうたい、体育、音楽、英語、そのあとにはスイミン

グ、と個々の講師を連れ、高校なみのプログラムを掲げて人集めに奔走した。小さな例では「か」という字が書けないで、ボール紙でつくった大きなかめの甲羅を背負わされて部屋中を歩き、廊下で立たされた、といったような冗談のような話がとび交った。急激な開発と人口増加により入園受付けには、想像を絶する一日徹夜という事態を起こし、翌年は二日徹夜（四十七年）と、エスカレートす



るばかりなので、次の年は抽選にした。早朝から、NHKの取材を受け放映された。「はたして、幼稚園はこれでよいのか」という疑問がつきまとった。緑の山が減った。たんぼが、畑がなくなった。木が少くなれば小鳥もいなくなるだろう、あの緑の葉っぱ一枚に匹敵することが私達にできるのだろうか。各地から研修にみえるみどり会の合宿の折に、二百人余りの先生方の中で、その疑問を投げかけた。その時の講師の一人であった周郷先生を、それから三年経って母の会にご講演をご依頼した時に（その間、親しくお話したこともなかったのに）先生は、その日のことを覚えていて下さった。第一声に、「幼稚園を建てるよりは、春になったられんげ草が咲くたんぼをそのままにしておく方が、子どもの教育にはいいんじゃないか、これがね、僕の心に残っているの、それがね、蕪木さんの考

えです。日本中幼稚園をつくっちゃったら、子どもがよくなりますか、それよりも健康な生きてる自然を残しておく方がはるかにいいです。それでは幼稚園をやめたら——、なんてあんまり強く言わないの、そう右から左に言うのは人を責めているってことなの、そういう心があるかどうかですよ。心の中にそういうことを思っていれば、この幼稚園は普通の幼稚園とちよっと違ってくるわけです。」

こんなちっぽけな私の発言を、忘れずに持っていて下さり、有難く、勿体なく、只管、かたじけなく思うばかりだった。

「人生でもそうでしょうけれども、生きるということはただ生きればいいというものじゃないんですね、人間においては生きるということは情性になりますからね。やはり生きるということは否定する気持があるから、生というものが味わい深い意味のあるものになる

んですね。」

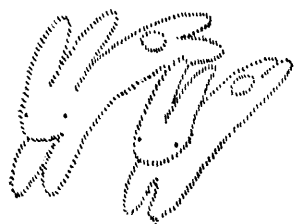
知能の未分化なもの程、感覚にたよることが多く、幼い者程、鋭いものだ。更に小動物に至っては、いち早く人間に感じないことも（例えば地震なども）予知することができると言われている。私というみずも、土の中で確かにとらえた本物の臭いだったのだ。そして月日が経つにつれて、私は私の感覚が間違っていないことが最大の喜びとなつて、挫折している時でもふっと先生の言葉が浮んでくると、励まされ又生きなおすことができる。この喜びを自分だけで噛みしめているのは堪えられず、私の出会いは遅かったし、是が非でも若いお母様方に聴かせたい一念で、ご無理を願って創立十周年（四十九年）のこの機会にと、ご講演を仰いだ。

十月一日 午後一時

一日五百本つくる焼鳥の串を半分つくつて
おとうちゃんにまかせかけつけたやきとり
やさん／四人の工具につくる昼食をきょう
は早くつくり、早くかたづけてきた鉄工所
の人／幼な子三人を畳職人のお父さんにあ
ずけて前の席に座っていた人／来月出産予
定の人／パートを休んできた人／お父さん
に会社の休暇をとってもらい、子ども達を
たのんできた人／農家の人／教員の奥さん
／八百屋さん／牛乳やさん／食料品やさん
……、みんながみんな先生のもとに走つて
きたのです。

十月一日 午後三時

ここはどこだろうと思った
窓の外の景色は市が尾に似ている
背の高い芒のしげみ
枯れてしまった柿の大木



休耕と収獲が隣り合っているたんぼ
椎の実をつついていているひよ鳥

どこからいらった

何という先生の

何の講演会だろう

日本の大学教授じゃあないし

日本の幼稚園じゃない

日本のお母さん方でもない

ここはどこだろうと思った

窓の外景色は幼稚園の隣の原っぱだ

伸びきった草の中に

かくれている赤いボール

折れたアカシヤの木

遠くの建売住宅

でもちがうんだ

人間がちがうんだ

話している人も

聞いている人も

なんだがちがう

吸う空気も

吐く息も

いつもとちがう

脈拍も鼓動も

リズムがちがう

通りぬける秋風も

きょうはちがう

次の日、お母様方から手紙を受け取った。

『平凡な人生の中にもキラリと光る時間、いかくつかあるように思えます。』

——それによって今までの生き方、考え方

を変化させる、或いは人生を変えさせる、そんな時間が――。周郷先生との出会いが、それであつたように思えます。陳腐な知識とか経験にあぐらをかいて干涸びかけていた神経が、俄に水々しい活力を得て一挙に動き出したあの興奮を忘れまい』

『怠惰な眠りを貪っていた感覚が、突然呼び起こされ、吃驚して動き出したという感じでした。静止してしまつた知識の残骸の中に、安閑と、しかも残骸物を通してしか子どもを見ていなかった二重の罪惡を犯した自責、もっと早く、十年前に周郷先生に出会つていたらもう少しましな親になれたかしら？　なんて思いました』

『イエス様がマリア様の左の胸に心臓の鼓動を子守唄に抱かれてゐる姿を発見して、感動された先生の優しさが、なんとも嬉しく思われました。生まれてきた子どもを通して、神

と触れ合つてゐるなと感ずる心を育てていかねばとおっしゃつたことに、私の心はいつもの傷みを覚えます。命あるものの不思議なとなみ、自然界の不思議なまでとしか言いようのない整然とした秩序を思うとき、なにか厳肅な思いにとらわれ、これはきつとなにか大きな力が作用して宇宙を支配しているような気がするのですが、その力が即、神と結びつかない凡庸さに苛立ちを覚えるのですが――。周郷先生が言われるヨーロッパ人と、日本人との違いも、多くの日本人の心の中に神が宿らないことが原因しているのではないかと思つたりします。お話を伺つてきょうは素直な気持ちになりました。神を信じたいのです』

卒園生のお母様からも『大好きな木の子どもの椅子に座り、当時を懐しむ間もなく、周郷先生の浮世ばなれのしたお姿や、お話にい



つかひき込まれてしまいました。その言葉

が音声を伴っているいいないにかかわらず、言葉はその人の考えを高めて、世界を広げていくってくれる、ということでした。私達が無意識に考えたり、話したり、書いたりしている言葉も、幼児にとっては新しい世界への光りであり成長を約束させてくれるものであることを知りました。「照千一隅」という私にとって初めての言葉も、その奥にひそむ計り知れない意味におどろきました。「市が尾幼稚園のお母様方は私の話を良く理解されるでしょう」と、先生はおっしゃいましたが、一か月に一度の母の会での基礎づくりがあればこそ、先生のお話が理解でき、あの感動が味わえたのだと思っています」

職員室の壁に、お願いして書いていただいた色紙の、「照千一隅」の文字がじっと私達を見ている。日に何度、この文字に眼をやる

ことだろう。

「一隅の光りが宇宙全体と響き合ってまわりを照らしている。僕は、もし本当に教育に価値があるものとすれば、一つの幼稚園は照千一隅という姿でなければならないと思う。ここに市が尾幼稚園があるということで、お母さん達や近所の世界、まわりの世界が生まれ変わってくる。人間づくりが生き返ってくる。不潔なものは全部なくなってくる。天を照らす一隅のような幼稚園になって欲しい。きょう僕はね、体の調子が悪いのにね、多少でも話らしい話ができたのはみなさんの顔の表情が良かったからです。みなさんが、話をさせてくれたんです。大変、感謝しています」

拍手のあと、誰一人として席を立とうとしなかった。小さな椅子に体を埋めて、いつまでも目頭を押さえていた。

(市が尾幼稚園)

アークヒルズと幼稚園

編 集 部

二十一世紀の全環境都市アークヒルズ。音響の良さ、カラヤンを招聘しようとしたことから落としコンサートでマスコミをにぎわしたサントリールホール、またその家賃の高さで有名になった森ビル、アークタワー及び全日空ホテルなどの総称である。いろいろ話題をふりまいたが、アークヒルズは六本木、赤坂地区の都市再開発計画であり、二十一世紀の都市モデルである。その外観は二十一世紀モデルにふさわしく、超近代的。

このアークヒルズの隣りに幼稚園がある。結婚式で有名な霊南坂教会の付属幼稚園がそれである。アークヒルズの建設に伴い、霊南坂教会もとり屋根のレンガ造りの建物からコンパクトなモダンなビルにかわった。超モダンビル群と幼稚園はどのように共存しているのか。先月号の「仮り園舎から新園舎への引越」でご執筆頂いた赤羽先生に再びご登場願ひ、幼稚園と地域との関わりを中心にお話をお聞きした。

——まず、仮園舎に移
ったいきさつからお聞
きしたいのですが……

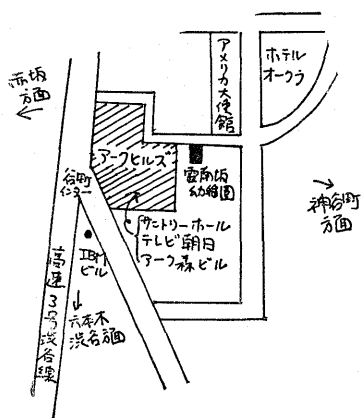
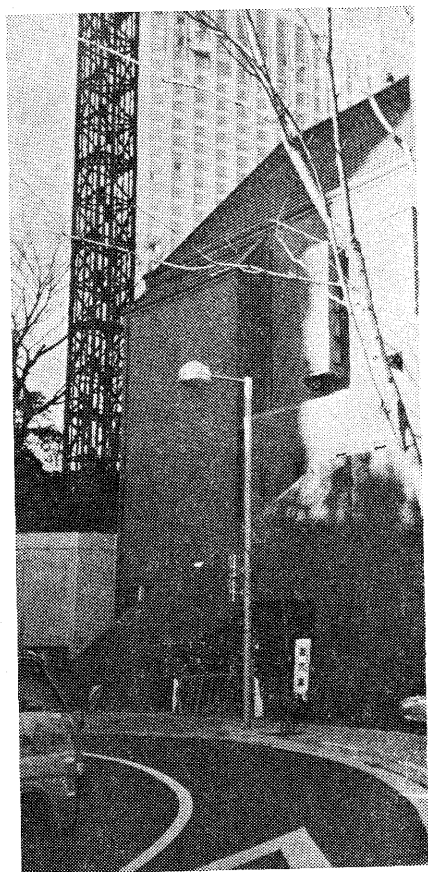
赤羽・森ビルの再開発
計画が出たのは、それ
こそ十年以上前ですね。

この区域で教会が一番
公共のもので、あとは
民家ばかりだったんで

す。それで、地域の皆さんがここにお集まりになって、
いろいろ協議なさいました。

教会は一応賛成にたちました。教会の建物はレンガ造
りの由緒ある建物でしたけれども、なにしろ古いもので
すから、白アリの被害やら何やらで大変だったんです
で、そろそろ建て直そうか、という時でしたので、一応
賛成、ということになりました。

——教会自体を（永久に）他の場所に移転して下さい、
というお話はなかったんでしょうか？



赤羽…賛成するからにはと、教会はあらゆる条件を出しました。ですから、あまり場所も変わらないで、ただ丘を削るぐらいですみました。

その工事に約二年かかりましたので、その間先月号に書きましたように、自然の多いお屋敷跡に移転していたんです。

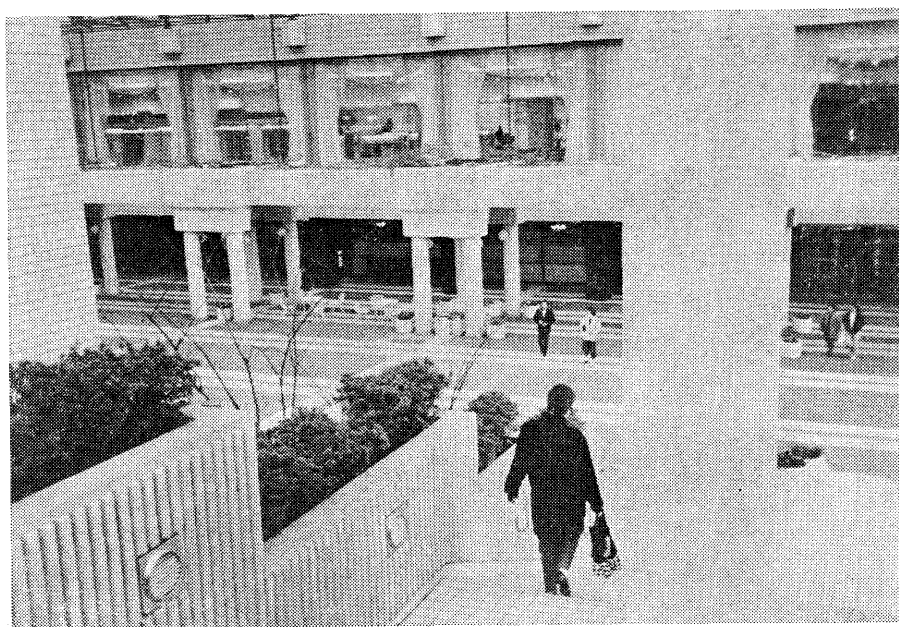
——新しい幼稚園は前の幼稚園とは、大分違うものですよですが……

赤羽…ええ。昔は丘の上に立っていましたけれど、今度は、教会の地下室ですから。裏から見たら一階ですけれど、表から見たら地下なんです。運動場も地下にあるということになりますけど、まあ、こういう場所ですからね、あるだけでも良しとしなければ、と思っています。

——でも、地下だと日当りも悪いし、保育にさしかえませんか？

赤羽…でも天気の良い日は必ずアークヒルズに遊びにいきますし、そこでお日様不足は補っています。

それに、回りはコンクリートだらけですが、隣りが唯



一残った民家なんです。だからその縁がおがめですし、このあたりではまだ恵まれていると思います。

——本当に大都会の中の幼稚園、という感じですが、園児の方はこの近くの方が多いんですか？

赤羽…それはほとんどいませぬね。今アークヒルズから一人、来年は二人来ることになっていますが、でも、歩いて来れる距離のところに住んでいる園児はほとんどおりません。

こういう場所でしょ。回りに人家はほとんど無いんですよ。ですから、お子さんはいらっしやらない。

それでも港区が一番多いんです。今園児は全部で三十四人ですが、そのうち半分以上いますね。あとは二十三区から来ています。去年は十七人卒業しまして、十七校の小学校へ行きました。むかしは横浜の方からも来ていました。ですから、そういう意味では地域に根ざした幼稚園、というのではないんです。

——先生はその三十四人を連れて移転なさったんですね。

赤羽…ええ、でも移転の時にちょっと問題がおこりました。いよいよ再開発が始まって、教会も移転する、という時に、教会も再開発だ、という事で新しい教会の在り方を模索しました。もともと幼稚園を建てたのは、区域の人達に伝道する、という使命を帯びたものだったのです。ところが、ほとんど区域の人は来ていない、というような状況になってしまっていましたので、もう幼稚園の使命は終わった、存続する意味がない。廃園にしたらどうか、という声が出ました。

——廃園、という意見まで出たんですか？

赤羽…そうなんです。九十九%廃園に決まっています。でも、お預かりしている園児のご父兄には、存続してほしい、というご希望が多く、反対のために動いて下さったんです。ご父兄は「先生は保育にがんばって下さい。あとは私達がやりますから」とおっしゃって下さって、それは見事に結束なさいました。幼稚園のパワーがひとつになって動いて、廃園決定をひっくりかえしてしまったのです。

たしかに、六〇年以上前に幼稚園を建てた時の使命は終わったかもしれないが、今はまた別の使命がある。そういうことをお母様たちが述べ伝えながら、署名をなさったり、いろいろな方に訴えられたりしました。それで、結局廃園を決定するはずだった教会の総会で、理事の方は全員「存続」で手をあげられました。そうしてやっと存続が決まったんです。

でも存続に決まっても児童がいなくなれば、また必然的に廃園ですよ。存続が決まったのが神様の御ところであるならば、子どもは与えられるであらう、と信ずるよりほかないんです。でも、私達も保育、子どもの命というものをもっともっと考えなければならぬ。光を子どもに当てて、子どもも愛に溢れているならば、子どもからも光がでていくわけです。そういう集団になりたいな、と思っています。

——そういう集団がこのアークヒルズのかたすみに生きる意義、というのは……

赤羽…私もね、この町がすっかり出来あがってしまう

と、予想はしていたものの、回りはすべてまっ白でしょう。ここから出るのがイヤになっちゃうくらいなんです。ここに子ども集団を神様が与えて下さったのは、どういうことなのかしら、と時々思っていました。でもまあ、そんなことは急いで考えることではない、それよりは与えられたものを私達が大事にしなければ、と思っていました。

そうしましたら、変なことに気づきました。お昼頃でも来てごらんになると、おわかりになると思うんですけど、アークヒルズの中のお昼時には、あの白いビルから出ていらした方が、疲れはてたようにベンチに座ってらっしゃる。皆さん生気がないの。その回りの空気が動かない、っていう感じなんですよ。

そこで、私は、そういう方の前では子どもたちとスクーターにのったり、追いかけてこしたりしているのが悪いような気分になってきちゃうの。『ごめんなさい、今幼稚園に帰りますから』なんて申しあげると、「いえ、良いんですよ」って皆さんがおっしゃって、子どもに話

しかけてくれる。子どもがころんただけで、よく笑ってくれるし、今日初めて「人」と話したように、子どもと語りあってくれるんです。最初は悪いな、なんて思っていたんですけど、最近は子どもが来るのを楽しみにしてくれるようになりました。

それで、私はこの空間に子供がいる、というのは意義のあることである。子供とは、疲れはてた大人を潤してくれるような存在であるって気づいたんです。

そのためには、子供に元気がなければしょうがない。横はビル、ビルで八方ふさがりだけれど、天井はあいてる。そこをかけめぐるような、子供の本来の姿をお見せしなければ、と思っているんです。

——先月号にお書きいただきましたけれど、ガリラヤ園のような幼稚園ですね。

赤羽…そうです。風がある日なんか、風船もって出掛けると、アークのビル風で風船どころか、子どもが飛ばされそうになるの。私なんか、風船を追いかけるのやら、何追いかけてよいのかわからなくなっちゃって、オロオ

ロしているんですけど。それを皆さん上の方からジッと眺めているの。別に大人を喜ばせようとしているんじゃない。自然の姿なんだけれども、それが大人の緊張を解かしているようですね。

それを見ると、子どもたちってすごいなあ、と私思うんです。緊張を解きほぐすって大変なことですよ。ね。それが、存在するだけで簡単に解いてしまうんですから。

——すばらしい地域交流をなさっているわけですね。赤羽…でも正式な交流は何もないのよ。それどころか、このビル群から受ける不都合なことも沢山あります。

全日空ホテルのすぐうしろでしょう。調理室の臭いがここにたまっちゃうんです。それに、前の道が全日空ホテルとオークラを結ぶ道路なんです。この教会ではしょっちゅう結婚式をして、披露宴はホテルでしょ。車はひっきりなしに通るし、その上、結婚式の時間と子供が帰る時間が同じになると大変ですよ。子供はお嫁さんを見たいけど、大人は自分のことで無我夢中だから、子供を

突き飛ばす。事故がないのが不思議なくらいですよ。

——でも、それでも、子供は大人の思惑なんか関係なく、勝手にビル街に適応してしまった、という感じですね。

赤羽・移転先が自然に恵まれたあまりにもすばらしい場所でしたしょ。戻って来るときは本当に心配しておりましたのよ。でも心配していたのは私達だけで、それは本当に良かったと思っております。

運動会もこの狭いところでやりましたけれど、私達は最初はどこでやろうなんて思ってもいなかったんです。でも、子供は「ここは広い」というのです。子供にとっては広いんです。

私はそれを聞いて、千利休さんのことを思いだしちゃって。千利休さんは、四畳半でお客さまをおもてなしなさるけど、夏は涼しく、冬は暖かく、お湯を冷ましたり熱くされたりして、工夫しておもてなしをなさる。

今は子供が千利休さんですね。子供は当然この場所で運動会が開かれる、ここで出来るものと思っているんで

す。ここ以外の場所にバスをしたてて出かける、なんて思ってもいない。じゃあ、ここでしょう、ということになりました。

でも全員で三十四人いますでしょ。その上にご両親、それ以上の数のお祖父さま、お祖母さまたちがいらつしやる。その人数がどうやって遊ぶことができるか、その流れを考えるのが大変でした。

狭くても集中してできるものがあるんです。うなぎつかみとかビンゴゲームとか。それから、アークヒルズをつかってみたり、庭の傾斜を利用してボール投げをしてみたり、あらゆることを工夫するわけです。それで、この狭い庭を中心にして、まわりまで取り込んでしまった運動会になりました。最後は、みなさん汗だくでしたのよ。

来年はオークラもつかってやりましょう。その次は全日空ホテルも使いましょう。なんて話しています。

どんな場所にいても、子供っていうのはすごいパワーがあるもんですね。

——前のお屋敷跡とこの場所の違いを、子供たちはどう受けとめているんでしょう。

赤羽：私たちは、あのお屋敷とこの場所を区別していませんけど、子供達には続いているんじゃないかと思うんです。お屋敷には木や草があった。ここは一本もないけど、かわりにジャングルジムがある、ぐらゐに考えているんじゃないかと思います。

この運動場は地下ですから、日は当たらないし、おまけに水はけが悪いんです。雨がふると二、三日カラッとしません。

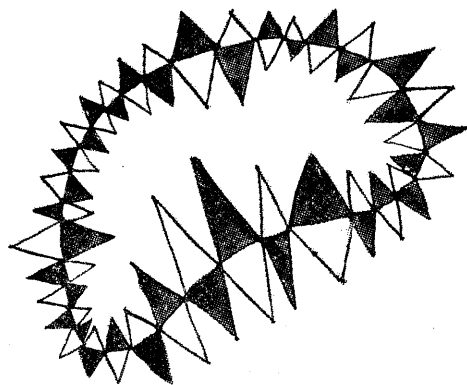
でも、それでも子供達は変わらず駆けまわっているし、それに、ここにはいつもは使わない部屋があるんです。暗くしているんですが、そこに子供達は行くのが好きで、「悪魔の部屋」と呼んで、探險しに行つてはあちこちぶつけて帰ってきます。どんなものにも子供達は遊びを見出してしまふんです。

だから、私はそれを見て考えさせられました。与えられたものは歎くものじゃないな、って。理想のもの、つ

ていうのは私達は頭に描きますよね。子供がいくら発想に富んでいるからといって、あまりに貧しいのもいやですが、与えられたところで私たちも満足しているのが、良い時間の流れなんだな、と思いますね。

わたりあう関係

森下みさ子



六助は、後ろに手をまわすと、へっぴり腰のようになって、ひょいと赤ん坊を背負った。あやすようにゆうらゆら、足で調子を取りながら歩きまわる。へそうらそら、オッパイのんでネンネしな——、ほら、オッパイのんで——へと、傍らの十郎が太鼓に合わせて謡いかける。「ほら、オッパイのんで——」と、すがるように催促するが六助はなかなか赤ん坊にオッパイをふくませようとしない。「それつ、オッパイのんで——」と、今度はドスのきいた声。はじけたように六助は赤ん坊をおろして、胸に抱く。会場からは「よくやった。上手、上手。」と、笑いとともに拍手が起こる。ただし、抱かれた赤ん坊は、逆立ち。足でオッパイを吸っている格好だ。「それじゃ赤ちゃん頭に血がのぼっちゃうでしょ。困ったもんだねえ。」という十郎のすっとんきよう

な声に笑い声はより大きくなって波立つ。

へはい、もう一度、オンブして——ネン
ネしな——へと十郎。「もう一度、オンブ」

……と、何を思ったのか、六助は逆立ちに抱いていた赤ん坊をポーンと高くほおり投げた。「ワァー」と大爆笑。「ちよっとお、あんたみたいなおかあさん、いないよ。」という十郎のせりふに、会場は笑いの渦になって大揺れだ。

ご安心あれ……赤ん坊は、布製の人形。とりかえても通じそうな名前であるが、六助が猿で十郎が猿まわしの親方である。早稲田銅鑼魔館という、猿には無縁の演劇場で、しかも階段状の会場狭しと座って見下ろしている観衆のいくつもの好奇の目を前にして、それでも六助はかなり上手に演じてみせたのだ。人形の赤ん坊のオンブ、酔っ払いの千鳥足、

鉄砲に打たれて倒れるところ……。その度に観衆は、「うまい、なかなかやる。」とうなずき、笑いながら、拍手を惜しまなかった。けれども……、爆発するように笑いが湧き起こって会場がどよめくのは、きまって六助が十郎の意図をはみ出る動きに出た時である。いくら促しても演技をしないと思っていると、シトシトおもらしをしていたり、急に人形をひつつかんでふりまわしたり、ほおりあげたり、一度などは十郎に牙をむいて踊りかかり、紐がちぎれそうなくらい左右に跳びまわったりもした。そういう時は、十郎も紐を持つ手に力をこめ、汗だくになって、なだめたり、おどしたり、と必死である。その一方で、間髪いれずに、観客をよりおもしろがらせるせりふもはさんでゆく。

観客が、こういう場面において、最もよく笑い、そして同時に心の深部をゆさぶられる

ような不思議な感動を覚えるのは、そこに過度のエネルギーが放出され、緊張がみなぎり、その刹那はじけとびちるような瞬間があるからだ。親方が教え、猿が教えられたとおり器用にやってみせる「演技」は、それなりの拍手を得るけれども、会場がどっと湧きたつのは、演技を越える瞬間である。オス猿の飼いならされることのない野性の力、人間の意図をはみ出る無意味で唐突な行為、それらが、用意された演技の枠をひき裂いて、舞台という空間を未踏の大自然に向って開いてしまう。そのとき、私たちの裡に潜んでいた何か得体の知れない力が突きあげてきて、はき出され、空気を震動させる……不思議な笑いの発散だ。

けれども、それだけではない。舞台上ではもっと大変なことが起こっているのである。親方は、猿の力をなんとかしようと身体をは

る一方で、話術によって巧みに演技の流れをつくり出してゆこうとする。こっけいなオチをつけたり、猿の気持をおもしろおかしく代弁してみたり、自らを戯画化してみせたり、そうして次の演技へと繋いでゆき、「猿まわし」という一連の語りの時空をおさめようとする。この時、親方は用意された筋書きの伝え手ではなく、猿のダイナミックな生きた動きに抗いつつも、その力にこそ乗って、真新しい物語を生み続ける語り部である。野性の爆発と、それをなんとか一つの流れに乗せようとする物語りの抗力、徹底して制御を拒む身体の暴挙と、語り続けることをやめない言葉の術……舞台上にはとてつもない力が渦を巻き、観る者を身体ごとひきこんでしまう。

日常的な挙動から大きくはみ出てわたりあう、そんな時の人と猿は神々しくさえある。今でこそ演劇用の小ホールで、つつましく座

った観客を相手にしているが、猿まわしはもと、中世の古きから放浪を続ける大道芸人である。大空の下、風にさらされ、鶏や犬の鳴き声が遠慮なくきこえてくる路上で、うごめきざわめく人々をとらえつつ、いつてみれば何一つ準備や予測のできないところで、その時々芸をこなしてみせてきた。そのような変異の大きい時空にさらされることによつて、猿はある瞬間野性の力を発散し、猿まわしはそれをその場で語りおさめようとし、より過激なエネルギーを放出しあつたのである。非日常的な時空を束の間持ちこんで、つむじ風のように去つてゆく彼ら芸人を、定住する人々は「まれ人」として迎え入れ、「神」の姿さえ重ねてみたという。彼らが神であるのは、「まれ人」であるからというだけではないだろう。彼らは、野性と文化、身体と言葉、逸脱と語り、寸断と連続という二つの力

がさかまく中で生きあうことにおいて、宗教的体験にもまごうような一瞬を、観る者にもたらずからにちがいない。

*

極最近目にする機会を得たこの白熱する舞台に、私はふと大人と子どもの根源的な関係を垣間みていた。もちろん、子どもが猿であり、大人は多かれ少なかれ猿まわしの役割を引き受けているなどと、軽々しくいうことはできない。両者の関係しあう意図も、存在の意味も違うのだから。それでもなお、いまだ社会や秩序のコントロールを十分には受けていない「子ども」という存在は、私たちの思いを越えてはるかに強い野性の力を発散するし、「大人」はそこにあるカタチを与えようとする存在であることは否定できないように

思う。たとえば、子どもが泣きわめく。暴れまわる。そういう時、傍らにいる大人はやさしくなだめすかすにしても、どなりつけるにしても、その行為をやめさせようとする。いや、もっと間接的であっても、そのワケを知ろうとしたり考えてみたりして、自分に納得のゆく言葉にうつしかえようとする。もちろん、こうでない場合もたくさんある。けれども、基本的には「子ども」と「大人」の関係には、こういう対立が含まれていると思う。子どもが人間の社会で生きてゆくということは、どんな形にしても大人の側から何かしらの去勢を受けてゆくことに他ならないのだから。

それなら、そういう関係を認めた上で、「大人」と「子ども」がわたりあい生きあう、ポルテージの高い瞬間がもてないものだろうか。子どもの野性を無視してただの弱い存在

に思いこんでみたり、ましてはなっから押さえこんだりしないで、やさしく穏やかに、あるいは強く激しくやりあってゆく、そんな瞬間、瞬間。野性のはみ出す力がなかったら、そして、それを受けとめてはりあう力がなかったら、大道の芸に心の深部をゆさぶるようなでき事は起こらないのだから……。わたりあう関係はきつと、上・下や保護・被保護や対立の関係を越えるだろう。越えて、大空の下ではじけとぶような肯定的な笑いと、生まれたての感動をかきたててくれるのではないだろうか。私の身近にいる保育者の、子どもとの貴重で魅惑的なやりとりを目にし、耳にし、保育の意図を越えて思いもかけずたどつくある地点の輝きに出会う時、ふと解き放たれたような、神性に触れような感動すら覚えるのは、そのためなのかもしれない。

(お茶の水女子大)

「すみかとしての幼稚園」

永倉みゆき



三歳児あか組の担任になって、泣く子をあやすのに精一杯で、あたふたと過ぎて行つた四月、五月。泣き声の合唱も次第に小さくなつてきた六月も半ばのこと。しゅんのおかあさんが私にこんなことを言つた。

「先生、実は昨日ね。この子、幼稚園に行くの嫌だつて初めて言つたのよ。今まで、一日おきに登園してのんびりしていたのが、ここところ毎日になつたでしょ。それまでこの子、幼稚園って、公園みたいなある日ぶらつと遊びに行く所だと思つていたみたいなの。それがやつと、こういうところだつてわかつて、嫌だつて言えたの

ね。それで随分すっきりしたみたいよ。」

その言葉は、私の考えをくると逆立ちさせるのに十分だった。それまで、私にとって彼は、附属幼稚園三歳児あか組二十名の中のしゅんちゃんという存在だったが、実はそうであってそうではなかった。ながさわしゅんという一人の人間がそもそも始まりであり、しゅんちゃんにとって幼稚園は、あくまでも彼が発見した彼にとってのものではないんだという当り前の事に、ここで私は、ガンと衝撃を受ける様な思いで気付いたのである。

一人一人の子どもの「個を大切に」とはよく言われるが、そういう殆んどお題目になってしまった言葉にはなかった生々しい重みを私は、この事実から受け取った。そして、それはそのまま、あか組の先生でいること——毎日、毎日、母と別れがたく泣き叫ぶ子を、何でこの私がひきさいて預からなければならぬのか——を、模索し始めた私にとって、ひとつの鍵になった。

幼稚園に受け入れる側である私達は、新人の子ども達

を迎える時、既に幼稚園というイメージを持っている。それと少しずれながら、母達もある幼稚園像を持って、子を送り出す。しかし、子ども、それも、生まれて三年少し、我が家をようやくすみかにし始めたばかりの子に、幼稚園なんて大きい固まりが、わかるう筈はない。また、その必要もない彼にとっては、出会ったものがそのまま幼稚園なのだから……。

そうしてみると、四月の始めから今に至るまでの、彼らが幼稚園を自分のものとしていく出来事をつなげることで、彼らにとっての幼稚園というものが、おぼろげながら見えてくるかも知れない。

そこで、これから試みとして、彼らの入園から今までの幼稚園との出会いと考えるものを、書き連ねてみることにする。

1 子どもが出会った幼稚園

(1) 自分のもの

はじめ、幼稚園は、彼らにとって自分の持ち物という形で現われる。新しい帽子、新しいかばん、新しい靴。初めて出かける幼稚園は、まず、この新しいものたちを自分のものにする、ということから始まるのではないかと思う。

帽子やカバンというと、私の心には、ひとつの光景が鮮やかに浮かんで来る。それは、四月の家庭訪問の時のことだった。二階にある自分の部屋を見せてあげる。ということ、階段を登って行こうとした時、廊下の隅の帽子掛けに、まだ匂いも新しい帽子とカバンが、ちょこんと乗っかっているのが目についた。毎日の暮らしのにおいがしみこんだその家の中で、そこだけ違う風が吹いている様だった。目にしみるような真新しいかばんは、それゆえに胸踊らせるような嬉しさと、新しい世界への緊張感を表わしていた。それは、まるでこの子は、もう家にも包まれている子どもではない。と証し立てているようにも見えた。毎日、皆、こんな思いで身仕度をして家を出るのかと思うと、何か胸がつまるような気持ちになった。

ことを覚えている。

家においては、幼稚園の帽子とかばんは、その子にとって一番身近にある「外」である。それが、母親と一緒に登園している間にいつしか自分にとっての一番の味方にかわる。

子どもは、すてきなもの、新しいものを身につけて登園する時、会う人ごとに「いいでしょ。いいでしょ」と自慢気に言わずにはいられない。それは、童話の「ちびくろサンボ」よろしく、新しいものを持って嬉しい得意気な子どもの気持ちの素直な表われであると同時に、まだ十分自分に馴染んでいないものを言い立てることによって、自分のものにしようとする、不安な気持ちの表われでもあるように思う。

このように、幼稚園の象徴である自分の帽子やかばんはある意味で幼稚園というもののとの出会いの第一歩であるように思う。家でなかなか朝の仕度をしないとか、幼稚園でなかなかかばんを降ろさない。また、放りっぱなし、ということ、単にだらしがないとか、習慣が身に

ついていないということではなくて、その子にとってかばんが——ひいては、幼稚園が、自分のものになりきっていない、馴染んでいないということの表われであるように思う。

次にあげるのは「自分のもの」をめぐる出来事である。

(1) 夏休み中の登園日の帰りのこと、次々と母に迎えられて帰る子どもたちの中、ともやが母と靴を探していた。いつもならいくつかの出入り口を、あたれば見つかる靴が、なかなか見つからない。それもその筈、ともやの靴は、かよこが間違えてはいて、帰りかけていたのである。かよこが戻って来て、二足を見比べてみると、全くよく似た赤いリボンの絵が、マジックで描いてあった。突然かよこが火のついたように泣き出す。

「この子、どうしちゃったのかしら。」

と母は、途方にくれている。

「これじゃ、間違えるのも無理ないよ」
皆のなぐさめの中かよこは延々と泣き続ける。

かよこは、三才にしては、非常にしっかりしているように見える子だった。けんかの仲裁などもやってのけ、幼稚園というものを、いち早くのみこみ、よくわかって行動しているように、一見、見えていた。それが、実は大変な緊張感の上に成り立っていたことを、このことは示している。自分の印まで確かめて、自分のものと信じていたものが、実は、そうではなかった、という驚きは、彼女の表の顔を崩してしまう程だったのだ。「自分のもの」というお守りが、彼らにとっていかに重要な、この一件からも伺えると思う。

「自分のもの」は、自分の分身のようなものである。自分の持ち物を自分のものと、確信することから、彼らの幼稚園生活は、始まるのである。

(2) 自分のこと

(2) のぞみ、朝来るなり、靴箱の前で「のぞみちゃんね、きのう指切って、くしゅりちゅけてもらった」と、一息に言うのと、ついと指を私の前に差し出す。小さい指には、救急絆が貼つてある。

(3) スカート、エプロン、頭に冠と、めいっぱいおしゃれをした女の子たちが、部屋の中を行き来している。その中のゆみこと目が合う。ゆみこ「あのね、あのね、ゆみちゃんみずぎかってもらった」嬉しそうに、両手を頭の後ろで組んではずんで言う。

(4) 朝、部屋の入り口まで、三輪車で来たともひこは、なかなか、そこから中へ入ろうとしない。そのうちかばんをしまったまま虫探しの仲間に入る。誰かが花をつむ。

「花より、ダンゴ」と急に、ともひこが明るく言う。
「パパは、花よりお酒」と更に、嬉しそうに続けて言う。

(5) ——— ももこの朝 ———

五月のはじめの日、いつもながらもこの朝は、涙で一杯のつらい朝だった。しばらくいてくれたお母さんが、別れがたさを振り切って、「じゃあね」と逃げるようにして、帰って行く。遊びから、ぱっと離れて「ママー」と泣き叫びながら、夢中で後を追うのもこ。私も後を追う。草むらから、フェンス越しに帰って行く母を見て「ママー」と叫び続けるももこ。私は、このつらさの前には、何をすることもできず、ただ一緒に悲しい気持ちを感じている。何をすることもなく、草をつむ。すると今が今まで、泣いていたももこが、全く違う調子で「ゆうちゃん(小一の兄)きょう、がっこうに行つた」と突然言う。「ああ、そう」と私、草をつみ続ける。ももこ、何を思ったか、自分も、花をつみ始める。「ゆうちゃんにあげる」と言う。

子どもが、自分のことや、自分の家の出来事を語り始

める時は、唐突という印象を受けることが多く、受け手である私は、面喰らってしまふ。一つの言葉、一つの物、或いは、何かの感じに突き動かされたようにして、そのことは、口元から流れ出す。このような、打ち明けた話、とても言いたくなるような話を、やや幼稚園に慣れてきはじめて五月頃からよく聞いた。

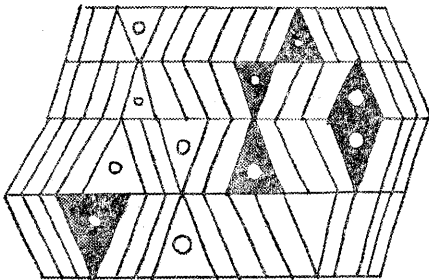
それは、あるものは(3)のゆみこのような、うれしさではじけんばかりの心から、洩れたつぶやきであったり、また、あるものは(2)ののぞみのように、家で起きた一大事を真剣に伝えようとするものであったりした。いずれも本人にとっては、胸の底にしまつてあった大事な喜びや驚きであり、(2)のような場合は、誰かにひと言いってしまえば、秘密の小箱の鍵は開けられてしまい、小さな秘密——隠すということではなく、自分だけが知っている。という意味で——の価値は下がってしまう恐れすらある。(3)のような場合でも、喜びの気持ちだが、そのまま受け取ってもらえるかどうかはわからない。それを敢えて言ってしまうのは何の力かと考え

れば、幼稚園に対する親しみの心の力だと、私は答えた。それは、幼稚園、または、その住人である職員の雰囲気だけから生まれたものではない。子どもの側から、幼稚園という場に対して、心を開いた小さなアプローチの一瞬なのである。(4)などは特に、誰に向けて言うというのでもなくつぶやかれた言葉であり、花を見て「花よりダンゴ」という愉快な語句を思い出し、その愉快さに促されるようにして「パパは……。」と家でも言っていて、笑い合ったのかもしれない言葉が続ける。それは聞いている者にも、暖かな一家団欒のひとつを思い起こさせ、心を和ませる。これら家について、自分について語られる言葉には各家庭の匂いがする。そして、それらは緊張で固くなっていた心の結び目が、ほっとゆるんだ瞬間にこそ語られ「話してごらん」と、促して聞いたものとは、全く質を異にする。

(5)のももこの例では、さらにこの感を強める。母がいなくなつて泣いているももこは、朝、一緒に寝ていた母の暖かさがまだ残っているような母の子どもそのま

までである。が「ゆうちゃん、学校に行った」と、きっぱりと言うももこは、もう母の懐にはいない。幼稚園のももこ” になっている。だから涙は、もう流れていないのだ。このように自分の家のことを語るということは、母の元で甘えられるところである、自分の家を、語られるものとして対象化し、自分から切り離す事である。それは、ほんの一時ではあるが、自分について、また家について語るとは、自分や家を、改めて言葉で捉え直し、外から眺める作業ともいえる。

子どもが、そうやって自分の中から言葉を一つ一つ生み出して、語ろうとするのを、こちらも大切に受止めていく。そして、子どもはしっかり受け止めてもらえた満足感から、次の機会にも、また話したいと、言葉を探す。繰り返し、繰り返し語る中で、子どもは、自分や自分の家についての認識をはっきりさせていく。幼稚園とは、そういう幾万もの自分を、子どもが自ら見つける場、また、さらに新しい自分を生み出す場なのかもしれない。



(3) 自分の場所

幼稚園には、大人側で決めたその子の場所というの
が、いくつかある。靴箱、タオルかけ、ロッカー（カバ
ン置き場とひき出しがある）である。それらには、名前
を書いたテープの上に、その子のマークであるシールを
貼ったものが、付いている。朝のタオルの交換は面白
い。名ふだを一つ一つあたってみて、「見いつけた！」
と大喜びする子、自分のものだけではあき足らず、他人
のまで探してやる子、それぞれである。しかし、それ
も、幼稚園との信頼関係がしっかりと結ばれてこそそのこ
とであって、そこが紛れもなくその子の場所になるのに
は、個人差こそあれ、ある道のりが要る。

(6) 初めての登園日は、母と一緒に過ごす一日だ
った。小人数で遊んだ楽しかった一日も終わり、帰り
という時、見ると、のぞみの手に引き出しにしまった
箸の着替え袋が、しっかりと握られている。「それは、

置いていくのよ。ここに入れておけば、また来た時
に、使えるのよ」と私とお母さんが交互に説得する
が、のぞみは「いや」と譲らない。とうとう最後には
持つて来ただけの荷物をそのまま持つて帰って行っ
た。

のぞみに限らず、持つて帰る、と言った子は何人か
いた。のぞみは、このようなことを二、三回繰り返し、母
の説得を聞き入れたのか、それからは、置いてくるよう
になった。しかし、登園後、母と別れがたく、置いてい
かれるのに怒って泣き続ける日々が、延々と続いた。こ
の頃、のぞみは（以前はなかったそうだが）トイレの水を
流す音を非常に嫌い、私がレバーを押そうとすると、慌
てて、両耳を手でしっかりふさぐ、ということをした。
家でも、何でもない時に、突然「ぐらぐらする。（地面
が）」と言って親を心配させた、と後から聞いた。今か
ら思えば二月生まれの幼いのぞみにとって、新しい場、
幼稚園は、捉えきれない、馴染みにくい場だったのだろ

う。自分の分身ともいえる、自分のもちものを、全く異質の空間に預けた上、大好きな母から離れ、見知らぬ子ども達の中に入れられる。トイレの水の音に対する怖がり様は、レバー一つで轟音と共に、自分の体から出たものを穴の中へと流し去ってしまう、得体の知れない水の流れに対する恐怖であり、それはそのまま、この頃ののぞみにとっての幼稚園の得体の知れないことと重なっていたのかも知れない。

ぐらぐらする地面というのも不安な彼女の心の表われであろう。その後、ある日突然トイレで、私が水を流してやろうとすると「のぞみちゃんがやる」と言い自分でレバーを押し、流れる水を、じっと見つめていたという出来事があり、それからはトイレの水の音が平気になっってしまったのである。いつとは言えないが、恐らくこの頃から、彼女にとって、幼稚園が少しわかりやすいものになってきたのかも知れず、朝も、いつまでも泣くということは、なくなってきた。

次に登場するけいちゃんも、なかなか自分の場所を信頼

できない人だった。タオル交換もカバンの中に入れてきた新しいものを出すのが嫌で、面倒臭さも手伝って、なかなか換えようとはしなかった。引き出しの中の予備の靴も、持って帰りたくて、帰りに何度か、押し問答を繰り返した事がある。そんなけいちゃんに驚くような瞬間がやってきた。

(7) 図書貸し出しの日、本は、一週間に二冊、手提げ袋に入れて、借りて行くことになっている。けいちゃんは、その手提げを忘れてしまった。かわりに紙袋を渡し、これでも借りられることを教え、そのまま他の子の世話に追われてしまった。貸し出しが終わり係の人たちを見送ってひいを見ると、さつきけいちゃんに渡した袋が、そこに空になって飛んでいるではないか。さあ大変。本は、誰かが持って行ってしまったのかも知れない。

「けいちゃん、本がないよ。大変だよ。探そう」と言うのと、けいちゃんは何言ってるの、という表情で「けい

ちゃんとここにいったよ」と言って「ほら」と引き出しの中を見せてくれる。そこには本が、ちゃんとある。私は驚いて「えらかったねえ。ちゃんとしまったの」というと、ニーと自慢そうに答う。

なんと彼が、引き出しを自分のものをしまう場所として使ったのである。あれほど信用のおけなかった引き出しを、いつの間にか、自分の金庫として認めていたのである。それから彼が、急にどうなったということはない、相変らずのけいちゃんなのだが、彼は、ここに一步、大きな足跡を残した。彼にとって、うやむやだった幼稚園の中の自分の場所というものが少なくとも一つはつきりした。

以上、述べてきたように、子どもは幼稚園という新しい場と出会って、そこに新しく自分の居場所を見つけていく。次には、更に自分にとっての幼稚園を広げ、幼稚園の生活を積極的につくり出していく様子を挙げてみた

い。

2 子どもの手になる幼稚園

(1) しまいこむ

1の(3)で述べたロッカーが、その後どのようにして子どもの手に渡っていくかを見ようと思う。

(8) みかが「白い紙ちょうだい」という。私は絵を描くのかな、と思って手近な箱を探す、くたびれたのが一枚見つかったばかりである。「こんなのしかないけど」と言うと、「あ、それでいいの」と喜んでもらっていく。そのことはそれで忘れていた。子どもが帰ってからふと見ると、みかのロッカーの上にさっきの紙が折りたたんで貼ってある。となりのものこの所には小さな紙のきれはしに、ももこ、と書いたのが貼ってあった。

ロッカーに自分の印を付ける、ということは、そのロ

ッカーが自分の一部になったことを示している。その子の場所を見分けるための名札は単なる目印にしかならなかったのが、みかやもこの手でみかやもこ自身の刻印を押されることで、ロッカーは真に個人的な場として生まれかわったのだ。

また、このロッカーは、秘密の守り箱としても機能する。

(9) 朝、ともひこがカニ好きのゆうじのために、さわがにを持って来た。昨日、二人で取り合ったとんぼを譲ってくれたお礼に、ということらしい。ゆうじ、嬉しそうである。ところが、やにわにゆうじがカニをポリ容器に入れるとひきだしにしまう。ともひこが驚いて開けようとすると「ばかだなー。もし……見つかつたら……」と、小さな声で耳打ちする。取られたら大変、というところだろうか。そのあと、二人は、何もなかったような顔でそこを離れて行く。

幼稚園は広く、大勢の子が住んでいる。今、自分が手にしている宝物も帰りまでちゃんとある、という保証は無い。ひきだしは、そんな時、絶対離したくない宝物の隠し場所にすらなってくれる。(9)では、引き出しは、二人の秘密を分かちあう仲間となり、心強い味方、守り主ですらある。

子どものひき出しを開けると、いろいろな顔がある。そこで見つけられるもの——こっそり集めた牛乳びんのフタ、作りかけの折り紙、きれいな紙切れ、リボン、本当は返さなくてはいけないはずのスカート、ブロック、カセットテープ。どれも、どこにでもあるようなものでありながら、どれ一つ交換できるものは無い。このひきだしの中身が雑然としてくれる程、その子の幼稚園生活が豊かになってくるともいえる。

こうやって、子どもたちは石ころからスカートに至る幼稚園の楽しみを、自分だけの秘密の場所に隠すことで、それらの遊びをより自分のものにしていく。そして同時にそれらをしまう場所であるひきだしをもまた、自

分の一部にしていくのである。

(2) 探し出す

あかぐみの部屋には、謎を秘めたしまい場所が二つある。一つは一角を横に仕切って、二階にしてある、ままごとの小部屋の下空間である。ここには、今は使われていない木の箱に入った昔の積み木のようなものが何箱か入っている。もう一つは、入り口を入ってすぐの右手にある、カーテンで目隠されたものおき（用具入れ）である。この二ヶ所はどちらも狭く、ごたごたしているのに、不思議に人気の場所だ。と言っても、特にこここんな風に遊ぶのを見た、という訳ではないが、なぜそうわかるかと言えば、殆んど毎日のように、その奥から出てきたらしい木づちやら棒やらが、部屋の隅で見つかるからである。こんなこともあった。

(10) 殆んどの子がプールに入っていた、おやつ後のひととき。私が部屋をのぞくと、ともやとひろゆきが古くなって色もはげかかった積み木で何かを作って

いる。ともや「いいしょう（静岡の方言。いいでしょう、という意味）。ぼくが、これみつけた」と言う。これはものおきの奥にしまっておいたものである。しばらくの間、遊んでいた。

しまいこむ一方で、子どもたちは部屋の奥にあったものを、引き出してくる。今度は幼稚園は秘密を守る仲間ではなく、奥底まで調べられる相手である。こうやって子どもたちは次々と文字通り隅から隅まで、幼稚園を征服していく。

3 すみかとしての幼稚園

以上のように、入園してからの約半年を振り返ってみると、子ども達が、思いがけずに成長しているのに驚かされる。頑固にその子のペースを守りながらも、少しずつ、附幼子どもの家の一員になりつつあるようだ。そしてそれは言ってみれば、その子が幼稚園と出会うことで、自分や自分の家を捉え始め、新しい環境の中で、徐

々に、徐々に自分の世界を納得しながら広げていく、ということなのではないだろうか。そして又、そこは子どもが社会的に一人立ちする最初の場であり、これから何度度も繰り返される、見知らぬ場で、自分を出す、という初めての試みの機会である。子どもは最初は何の関係もなかったよその場所に自分の場をつくり、ぼつりぼつりと自分を語り始め、好きなものを見つけ、秘密を作り、やがてそこを足がかりにして、仲間の中へと飛び出して行く。幼稚園は、恐る恐る踏み出す一步を暖かく受け入れられる場であり、何かを教えられて身につける場というよりもむしろ、もっと生々しい生活の場、ひとの匂いのする住み家なのである。そこには、遊ばせるための遊具より、もっと以前に、子どもを安らいだ気持ちにさせる、子どもにとっていこえる場が、なくてはならないのだと思う。

すみかとしての幼稚園

そこには、ぼくの場所があり

すてきな仲間が待っていて、

部屋を開ける鍵は

いつも

ぼくのポケットの中

(静岡大学附属幼稚園)

子どものための博物館

首都圏のユニーク50館ガイド

石井 恒男 著

フレーベル館

定価九八〇円

春になり気分も軽くなると、フ拉里とどこかに行きたくなるものです。子どもを連れて行くことを考えると、すぐ頭に浮かぶのが、遊園地、デパートなど。しかし、人出も多いし、お金もかかるしと、つい億劫になりがちです。そんな時、参考にしたいのが、この本。

例えば、長屋、駄菓子屋など下町の情緒が味わえ

る「下町風俗資料館」、地下鉄のことならなんでもわかる「地下鉄博物館」、ボニーにじかにさわれる「馬の博物館」、コンピュータグラフィックが楽しめる「IBM情報科学館」など。いろんな種類の博物館が、東京を中心に関東地区で50館紹介されています。

東京に住んでいても知らない所は多いもの。ゆっくりページをすすめてゆくと、知らない世界が広がるようで、それだけでも楽しくなってきました。週末など、ちょっと行ってみようかなという気になる楽しいガイドブックです。

また、多くの博物館の入場料が、百円とか二百円。中には無料なんというのものもあるんですから、嬉しくなります。

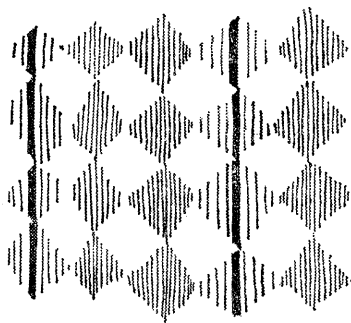
博物館までの地図も出ていて、とても親切な本といえましょう。

若いお母さんたちへ

ある日のこと

はるにれの会

木村磨理子



十月半ばのよく晴れた土曜。子ども達は急いで昼食をすませると外にとび出していきます。長男、小学四年生。「ぼく、Hパークハウスに行ってくるね。野球をやるんだよ。」次男K。小学二年生。「ぼくは、N君の家に行ってくるね。」今、夢中になっている牛乳キッップを大事そうにかかえて出ていきました。三男J、幼稚園年長組。「ぼくは、ハイツのT君のところだよ。」四男Y、幼稚園年少組。いつもJの後について遊びにいっています。

た。今まででしたら、「Jちゃん、待っててよ。ぼくも行くから」と昼食もそこそこへソをかきながら、Jについていきましたが、この日は、少し様子がちがっていました。

幼稚園に入って半年たった日のことです。いつものように、Jが先に昼食をすませました。「Yちゃん、まだなの。ぼくは、遊びにいくからね」の声にも、Yはのんびりと食事をしています。Jは「早くしてよ。ぼく、先に行くよ」と落ちつかない様子でYをせきたてました。Yは「先に行ってもいいよ。S君の家に行くから」といって、Jが遊びに行くのを見送ったのです。この時のYの表情に自分を中心にした友人関係をもてたことにより、Jの存在なしでも遊べる自信のようなものが見えました。「じゃ、ぼくのお友達のS君のところに行ってきます」といって、一人で出かけていきました。「ぼくの」と言う時に、ニコッと笑ったのです。子どもの成長をまのあたりにして、とてもうれしく思いました。

我が家は、千葉県松戸市横須賀にあります。お隣りの新松戸地区には十四階立のマンションが数多くあり都市化されていますが、家の周りは、空地や畑があります。この地に家を建てて三年になりますが、一戸建住宅がまだ少ないため、近所では、息子達と同年代の友達と遊ぶ機会がありませんでした。子ども達は、新しい集団生活の場で友達をつくり、近くのマンションの子どもと遊ぶようになりました。Aが友達と遊ぶ時はKがついていきました。Kが友達をみつけるとJと一緒に行きました。Jが幼稚園に入ると、いつもYと一緒に遊びについていくのが常でした。この日のように、四人の子ども達が、別々の遊びの世界をもったのは、はじめてのことだったのです。子ども達が外へ出ていったあと、家

の中が静まりかえっています。庭では、小鳥のさえずりも聞こえてきます。

長男が一寸五ヶ月の時に次男が生まれ、その後二年毎に三男、四男が生まれました。今になって思うと、もう少し心にゆとりをもっていればよかったと反省することの多い毎日でした。一日の生活の時間の流れに追われ、子ども達を「早くしましう」と追いたてることが多く、また「ちょっと待っててね」と言って、子どもの気持ちに応えることを後回しにして用事をしていたこともありました。今日こそ楽しい一日にしたいと試行錯誤の毎日だったように思います。

「ただいま」の元気な声。外では、様々なことに出会ったことでしょう。どの子も満足気な顔をしていました。四男Yは「ぼく、ちゃんとチャイムを聞いて帰ってきたよ。」と得意気に話します。自信というものは実に表情を生き生きとさせるものだと感じさせられました。

その日の夜のこと。次男K。絵や工作が好きで、いつもていねいに取り組む子です。夕食後、変身ロボットのぬりかえをはじめました。夢中になっているところへ長男Aがやってきました。「おい、そこは青だよ、表紙をみてごらん。」と言いながら、Kのそばでじっと見ています。自分もぬりたい様子で暫く見ていましたが、Kは色をかえずにぬっています。Aは「それは違うよ。上手にぬってあげるから、かしてよ。」Kは「いいんだ。僕の決めた色なんだから。」と言ってAの体を押ししました。Aも「何をするんだ。せっかく教えているのに。」とKをこづきます。子ども達は互いに押し返すことの繰り返しから、けんかに

なっていました。そばで兄達のやりとりを見ていたJとYが、これに加わりました。

Jは「僕はKの仲間だ。」Yは「僕はAの仲間だぞ。」とそれぞれ仲間の一員として宣言をしてポーズをとりました。「けんかに加勢する」というより「遊びに参加する」という感じです。長男Aと四男Y、次男Kと三男Jのグループに分かれました。最近、KとJは物の取り合いなど小さなことで気の合わない面が目立っていたので、私にとっては、予想外の組み合わせでした。AとKは本気で取っ組みあいをしています。JとYはまるでダンスのようでけんかのポーズを楽しんでいるように見えました。しかし、JがAを蹴ったことからAが怒り、AとJの葛藤が生まれました。Aの力がJに向いたのでKがYの方に近づいた途端、Yは「ワンワン。」と犬の真似をして逃げ出したのです。Yは力ではいつも負けているので、動物に変身して身を守ろうとした様子でした。A「何をやっているのだらう、Yちゃんは。」Kが「犬のつもりだよ、変なの。」と言うと、Yは「ワンワン。」とうなづきました。するとJもニコニコしながら「ワンワン。」と犬の真似をしてYの後をついて歩き出しました。AとKは、四つ這になって動き回る弟たちを見てともに笑い出したのです。AとKのお互いに反発する心がずっと消えていました。Kは「Aちゃん、少しぬくてもいいよ」と譲歩し、Aも「ありがとう」と言って二人でぬりえを始めました。JとYは、今度は馬になったり、うさぎになったりして動物の真似ごっこへと遊びが変化していききました。私は、けんかをしている子らにどう言葉かけをしようかと考えているうちに、思いもかけない展開があり、子どものやりとりを辛抱強くみることも大切なことだと痛感しました。

我が家では、四人兄弟の年齢が近いせいか物の取りあいや順番でぶつかる場面が日に何度もあります。子ども一人一人が自己主張をした時に、その気持ちをどう受けとめて対処していくかは、非常に難しいことですが、子どもとのふれ合いを大切にして日々を過ごしたいと思うこの頃です。子ども達の寝顔をみていると、「明日こそ、子ども達とゆっくりつきあってみよう。子ども達の心の世界と一緒に遊んでみよう」という気持ちがわいてきます。四人の子がそれぞれに私を必要としているのだから……。

明日、天気になあれ。

お詫びと訂正

十二月号

P 10

嘘↓虚

P 35

持ししめす↓指ししめす

P 38

幼児の教育二号↓八四巻二号

一月号

P 42

水柱↓氷柱

P 45

志し「た↓志し

「エレガントマナーブック」の類の本が若い人や若い主婦の間で売れています。私も一冊買ってみました。エレガントという名がついているので、一体どんなすてきなことが書いてあるのだろうかとかウキウキしながらページをめくりました。冠婚葬祭のマナー、服のTPOなどをはじめ、食事のし方、電話のかけ方までいろいろのつていましたが、どれもエレガントというよりは、ごく当り前のことばかりなのです。

「食べながら話してはいけません……」
「突然の訪問は迷惑なので、必ず電話を。」
「食事時の訪問は避ける。」など、母親が子供に教えるマナーばかりでした。

おけいこ事の教室が人気を集め、お嫁入り前の方が沢山通っていらっしやるようです。私もいろいろな方々にお目にかかりました。しかし、一時的にそんな所で習っても、それが生活の中に根づくには時間がかかります。しかも成長して

からのものは、幼い頃習ったものより身につけにくいと思います。マナーにも、それを教える臨界期があるのではないかと思います。

20代はじめの方々は、カタにはまらない自由さを楽しむのが上手です。カジュアルな感じをととても楽しんでいるように見えるのですが、カジュアルはフォーマルがあつてこそそのカジュアルであることに気づいていないようです。

食べ方ひとつにしても、どこまで崩して大丈夫かという線がわかっていないようです。そういう若者が、いくらタキシードを着ても、それがタキシードに見えないのです。まるでごく普通の服にしか。中身がしっかりしてないでただまわりを飾る。なんかとても薄っぺらい感じがしてなりません。ちょっと年寄っぽい見方かもしれないけれど、一番基本的なマナーをしっかり和家庭で身につけてほしい。それが一生の財産なのだから……。

幼児の教育 第八十六巻 第三号

三月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十二年二月二十五日 印刷

昭和六十二年三月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

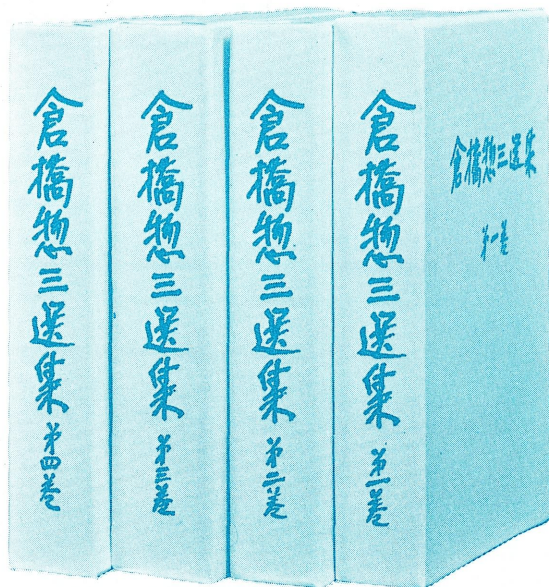
倉橋惣三選集〈全4巻〉

B6判 上製本ケースつき



倉橋惣三

東山魁夷装丁の
美装本!!



わが国幼児教育の基礎的な理論を集大成し、熱心な指導と啓蒙によって、幼児教育界に多大な貢献をなした倉橋惣三先生の没後10年を記念して刊行された選集。

第1巻 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル/416頁/定価2,000円

第2巻 幼稚園雑草/448頁/定価2,000円

第3巻 育ての心・就学前の教育他/472頁/定価2,400円

第4巻 保育案他/456頁/定価2,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

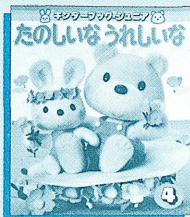
子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

保育絵本9誌の新しい企画、夢が大きくひろがります。

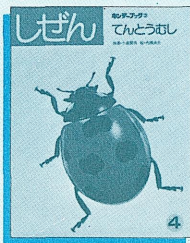
はじめての生活絵本 キンダーブック ジュニア

創刊



★ L判 22頁 付録母親向け解説書(こくま通信) / 4月号特別付録「たのしいしール」「このほり」 250円

自然の不思議を感動的に伝える しぜん —— キンダーブック③



★ L判 / 32頁 / 上製本 / 特別付録「このほり」 / 330円

絵本を開く楽しさをあたえる キンダーメルヘン



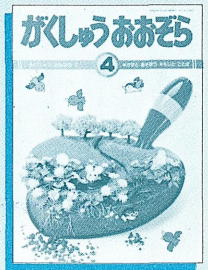
★ L判 / 28頁 / 特別付録「このほり」 250円

ゆたかな情操と創造する心を大切にする キンダーブック①(情操)



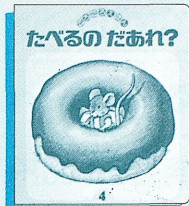
★ A4ワイド判 / 36頁 / 特別付録「ワイド版カラー工作」「おともだちしール」「このほり」 / 280円

幼児の学習意欲を生みだす がくしゅうおおぞら



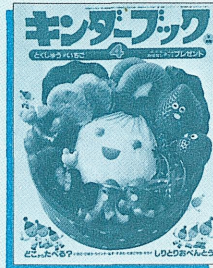
★ A4変形判 / 36頁 / 別冊付録「おかあさんのほん」 / 特別付録「あいうえおひょう」「このほり」 / 300円

園生活ではじめて出会う絵本 ころころえほん



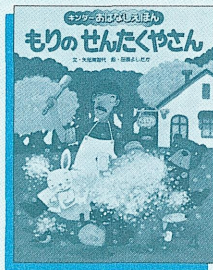
★ A8判 / 20頁 / 特別付録「このほり」 / 250円

観察する目と考える心をそだてる キンダーブック②(観察)



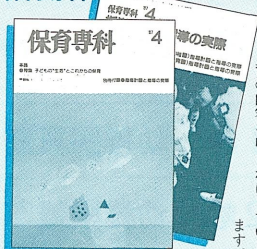
★ A4ワイド判 / 40頁 / 特別付録「めいろブック」「ワイド版カラー工作」「しール」「このほり」 / 280円

夢と感動する心をそだてる キンダーおはなしえほん



★ L判 / 32頁 / 上製本 / 特別付録「このほり」 / 330円

保育専科



定価400円
別冊付録つき

'87フレーベル館 月刊絵本ラインアップ

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館